

竹野一丁目遺跡

第1次発掘調査報告書

2007年3月

鈴鹿市考古博物館

例 言

1. 本書は三重県鈴鹿市竹野一丁目9・10に所在する「竹野一丁目遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査はマンション建設の事前調査として、鈴鹿市教育委員会の指導のもと、鈴鹿市遺跡調査会が実施した。
3. 調査にかかる費用は、三交不動産株式会社が負担した。
4. 調査は平成6（1994）年4月11日から5月7日にかけて実施した。
5. 調査面積は680 m²である。
6. 調査の体制（当時）は下記のとおりである。
調査主体 鈴鹿市遺跡調査会 代表 市川年夫（鈴鹿市教育委員会教育長）
調査担当 鈴鹿市教育委員会文化財保護課 藤原秀樹 新田剛 清山健
調査作業員 伊藤キミ 岡田利子 岡田富子 川原せつ子 小林明 鈴木林三 辻内久雄 林よし子
藤見たかを 前川利行（鈴鹿市シルバー人材センター）
7. 本書の執筆・編集は鈴鹿市考古博物館埋蔵文化財グループ 藤原秀樹が行なった。石硯の実測は新田の協力を得た。
8. 土壌の科学分析は株式会社パリノ・サーベイに委託して実施した。
9. 調査記録および出土遺物は、鈴鹿市国分町224番地所在の鈴鹿市考古博物館にて保管している。
10. 調査に使用したレベルは北側道路側溝に仮ベンチマーク15.200 mを設定して求めている。現地では磁北を用いて記録を行った。本書では、当地及び当時における磁北の偏移N 6° 20′ Wをもとに方位北に変換した。
11. 報告に利用した記号はSB：建物 SC：道路 SD：溝 SE：井戸 SK：土坑 SF：畦 SX：水田 p：柱穴である。

目 次

例言・目次	i
I. 位置と環境	1
II. 調査に至る経緯と経過	2
III. 調査の成果	3
1. 基本層序	3
2. 遺構と遺物	3
IV. まとめ	6
遺構図版	7～12
遺物図版	13・14
実測遺物観察表	15
写真図版	16・21
附論 竹野一丁目遺跡における中世の古環境について	22
報告書抄録	25

I. 位置と環境

竹野一丁目遺跡(1)は、鈴鹿市竹野一丁目(旧字里中)、近畿日本鉄道鈴鹿線の三日市駅の北側約0.1kmに位置する。

鈴鹿川右岸には低位段丘が広がり、竹野・野辺^{のんべ}といった集落が点在している。遺跡は谷底平野から約0.25kmほど南へ入った地点に立地している。

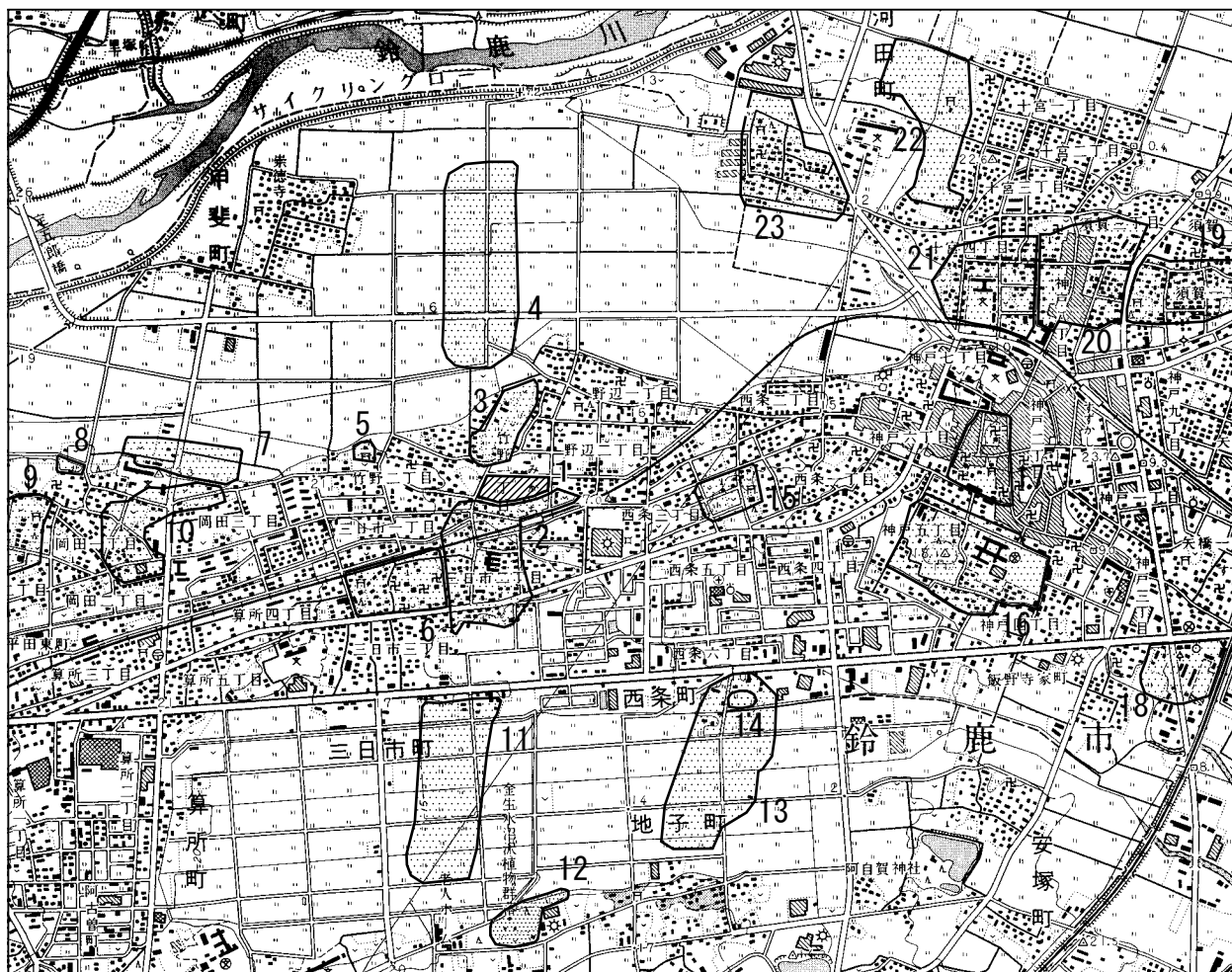
低位段丘上ではあるものの、鈴鹿川の氾濫時に河道となり削剥された流路痕跡に位置している。そのため、遺跡の南側の近鉄鈴鹿線が走る三日市の段丘面とは約1.5～2mの比高差がある。よって、低位段丘上とはいいながら地下水の供給が豊富で、周囲が桑畑や蔬菜畑に利用されているのに対し、遺跡の位置する流路跡においては以前から帯状に水田が営まれている。

鈴鹿川右岸の段丘上の遺跡分布は、左岸の高位段丘上がほぼ全面遺跡で覆い尽くされているような状態であるのに

対して、分布状況は極めて乏しい印象を受ける。

上流部にあたる天神遺跡(8)で古墳時代前期の竪穴住居群が発掘調査され、岡田遺跡(7)の発掘調査では流路状の凹地から縄文晩期～中世に至る遺物が採集されていた。岡田古墳群(10)は未調査のまま破壊されてしまったが、採集された遺物から5世紀末から6世紀前半にかけての初期的な群集墳とみられる。下流域では低位段丘先端部の十宮町から須賀町にかけては神戸中学校遺跡(21)・萱町遺跡(20)・須賀遺跡(19)といった弥生後期の遺跡が立地する。平成6年の調査当時の鈴鹿川右岸の遺跡に関する調査事例、情報は乏しかった。

近年、開発に伴い岡田南遺跡(10)、岡田神社遺跡(9)、狐穴遺跡・古墳(15)等の発掘調査が実施され段丘端や、さらに奥まった部分にも、古墳・古代集落・中世村落等の遺跡が分布することが徐々に確認されつつある。



1. 竹野一丁目遺跡
2. 三日市東遺跡
3. 竹野遺跡
4. 野辺遺跡
5. 竹野神社遺跡
6. 飯野神社遺跡
7. 岡田遺跡
8. 天神遺跡
9. 岡田神社遺跡
10. 岡田南遺跡・岡田古墳群
11. 三日市南遺跡
12. 金生水遺跡
13. 沢遺跡
14. 沢城跡
15. 狐穴遺跡・狐穴古墳
16. 神戸城跡・本多町遺跡
17. 龍光寺遺跡
18. 高田遺跡
19. 須賀遺跡
20. 萱町遺跡
21. 神戸中学校遺跡
22. 宮ノ前遺跡
23. 河田宮ノ北遺跡

Fig.1 竹野一丁目遺跡の位置と周辺の遺跡(1/25,000)「鈴鹿」

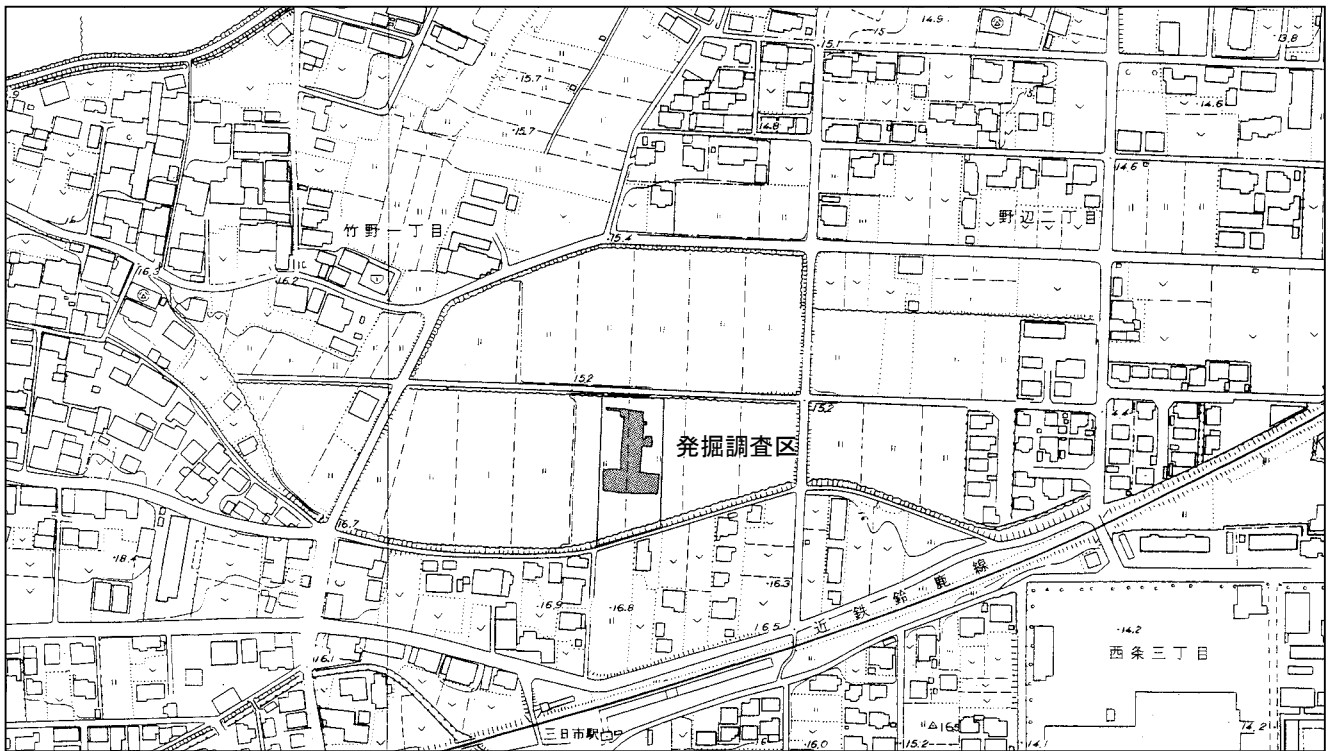


Fig.2 発掘調査区配置図 (1/2,000)

Ⅱ．調査に至る経緯と経過

当遺跡は、近鉄三日市駅の周辺の低位段丘上で、国道1号線北勢バイパス建設計画に伴う分布調査の際に新たに発見され「三日市東遺跡」として登録された遺跡である。

平成6年、三交不動産株式会社が当地に分譲マンション建設を計画した。建設予定地の南半が三日市東遺跡の範囲にかかることから、同年3月14日に開発予定地の試掘調査を実施した。その結果、遺跡として括られた開発対象地南半を超えた、ほぼ開発地区の全域から土坑・溝・柱穴等の遺構が検出された。

この結果をもとに、鈴鹿市教育委員会と三交不動産株式会社が協議を行なった結果、建物の基礎部分について本調査を実施し記録保存とすることに決定した。調査は鈴鹿市遺跡調査会(会長 市川年男)を主体として、同年4月11日から実施することになった。調査対象面積は680㎡である。

試掘調査の結果、当初の三日市東遺跡の範囲が北へ広がることが明らかになった。さらに、三日市東遺跡の主体となる上位の段丘面と、今回の対象地となる低位の段丘面では地理的な条件にも差があることから、三日市東遺跡とは区別し新たに「竹野一丁目遺跡」を設定することとした。

調査は、建物の基礎によって破壊される部分を対象として実施した。試掘調査において、南半の堆積の深いことは確認されていた。そのため、排土置き場の都合もあり調査に着手した4月11日から、調査区南側に大型重機を投入して表土除去を行った。試掘調査の結果としては、南側は

谷状地形に向かって落ち込む再堆積層で、遺構としては東西方向の溝状遺構が存在するのみと考えていたため、東西溝の肩が確認できる深さをめどに掘り下げを行った。そのため、後に判明する遺構の埋土の大部分を一気に除去してしまうという失敗を犯した。

4月13日から作業員を投入して検出を始めたところさまざまな遺構が現れ、この部分が遺跡の最も重要地点であることに気づいたが、後の祭りであった。その後は、作業員を集中的に投入して遺構の掘り下げを行い、4月20日には南区の遺構掘削は終了し、遺構の写真撮影を行った。

調査区北半については、4月14日に表土除去を行った。耕作土を剥ぐと直ちに地山面で、遺構の姿が現れるような状態であった。そこで、南区の掘削作業と平行しつつ遺構検出と略測を行った。4月21日から作業員を北区に移して、ピット・土坑の掘り下げに取り掛かった。北区の遺構は埋土が浅く、出土遺物も乏しいこともあって4月25日までに北区はほぼ掘りあがり、遺構の写真撮影を行った。

その後、調査区の南東端で確認されていた東西大溝のサブトレンチや調査区北西部に拡張トレンチを入れるなど、追加の掘削を行い、4月27日を持って作業員による掘削作業は完了した。4月26日から4月29日にかけて調査員が遺構の平面実測を行い、4月29日にレベル入れを行った。さらに、遺構断面図の作成などを継続し、すべての記録作業が終了したのは5月2日であった。

その後、連休のあけた5月6・7日に機材の撤収と現地の仮埋め戻しを行って全作業を終了した。

Ⅲ. 調査の成果

1. 基本層序

調査区は直前まで水田として利用されていて平坦であり、標高は約 14.7 m である。

しかし、本来の地形は北から南へ緩やかに沈み込んでいたとみられる。そのため、調査区の北側では現在の水田耕作土・床土約 0.25 m (N1 層) を除去すると直ちに基盤層 (地山: N0 層) が現れる。特に北端では、基盤層自体もかなり削平されているとみられる。

調査区中央から南にかけては、現耕作土・床土 (S4 層) もやや厚みを増し 0.3 ~ 0.4 m ほどになる。その下層は 0.4 ~ 0.5m の暗灰褐色土層 (S3 層) で、おそらく中世後半から戦後の耕地改良まで延々と利用された耕作土であろう。南西の拡張部分ではさらに厚く 0.8 m ほどあり、中間に黒色土の間層 (S3b 層) が部分的に入り、それを境に上下 (S3c, S3a 層) に分層できる。そして、南中部・南東拡張部の落ち込みの範囲には、遺構埋土として表土除去時に削平してしまった黒褐色土 (S2 層) が 0.3 ~ 0.4 m の厚みをもって堆積し、さらに黒色土 (S1 層) が基盤層上に 0.1 ~ 0.2m 堆積している。

各層が、中世頃から現代まで水田として利用されてきたことは、疑いはないと思われるが、土質によるためか酸化鉄やマンガン粒の沈着はほとんど観察されなかった。

調査区南側の基盤層 (S0a 層) は黄褐色粘質土であるが、南東拡張区では上面に純粋な黒色土 (クロボク: S0b 層) の堆積がみられる。遺構埋土の状況から見て、中世までは地表の広い範囲をクロボクが覆っていたのであろう。

基本層序

調査区北半

N1. 表土 暗灰色砂質土 (現水田耕作土・床土)

N0. 地山 暗黄褐色砂質土

調査区南半

S4. 表土 暗灰褐色砂質土 (現在の耕作土・床土)

S3b. 茶 (暗灰) 褐色土, 白色砂礫含む, 黄褐色土の細かいブロック多い

S3c. 黒色土, 調査区西側の溝上に見られ, 薄く部分的に入る

S3a. 暗茶褐色土, 調査区西側の溝上に見られる

S2. 黒褐色土, 黄褐色土の細かいブロックわずかに含む

S1. 黒色土, 黄褐色土の細かいブロックきわめて多く含む

S0a. 地山 黄褐色粘質土

S0b. 地山 黒色土 (クロボク)

2. 遺構と遺物

検出した遺構を中心にまとめる、出土遺物の個々の詳細については表 1 にまとめ本文中では詳しく述べない。

掘立柱建物

SB01 調査区の北側で検出された。3 間×3 間の総柱建物である。東西 5.6 m (柱間 6 尺)×南北 5.0 m (柱間約 5.5 尺) を測る。建物の主軸は N 8° E 振れる。柱掘方は、方形~隅丸方形で形はしっかりしているが、一辺 0.2 m と小

型である。また残存深さは西側で 0.3m, 東側では 0.15 m と浅い。埋土は黒色~暗茶褐色土に地山土の細かいブロックが混じるものが多い。柱痕は SB01 の p-4・p-9 で観察できたが、径はほぼ掘方いっぱいである。柱穴からの遺物の出土はほとんど見られなかった。

SB02 SB01 の南に隣接するように検出された。柱の切り合い関係は無いが、近接しすぎているため同時期のものではない。4 間×4 間の総掘立柱建物である。東西 8.8 m (柱間西から約 7.5 尺・6 尺・8 尺・8 尺)×南北 7.2m (柱間 6 尺) と桁行の柱間は変則的である。建物の主軸はほぼ方位北である。柱掘方は、円形のものが多く不整な形も見られる。径は 0.3 m 以上と、やや SB01 より大きい。掘方深さは西側で 0.4 ~ 0.5m, 東側では 0.1 ~ 0.2 m である。埋土は黒色土で柱痕は確認できなかった。p-6 から山茶碗片が、p-34 から山茶碗 (11) が出土したが、その他の柱穴からの遺物の出土は無い。

SB03 SB02 と西妻をほぼそろえ、北へ 0.65 m ずれた位置で SB02 と重複する。主軸は SB02 と同様にほぼ方位北を向く。東・南側で柱の残りが悪いため全体の規模は不明だが東西 4 間以上×南北 3 間以上の規模があったものと見られる。柱間も均等ではないが東西 6.5 尺, 南北 6 尺が想定される。柱掘方は貧弱で径 0.2 m に満たず、残存深さも 0.1 ~ 0.2 m 程度である。埋土は黒色土で、p-11 から山茶碗片が出土したほかは、遺物の出土は見られなかった。

道路跡

SC01 南西拡張区で確認された、溝 SD01 と SD02 間の幅 1.8 m の平坦面である。上面はよく締り、舗装のための礫石や中世陶器片が撒かれていたため道路跡とした。延長約 12m を検出した。方位はほぼ正方位に近く、調査区の南端付近で緩やかに東へカーブする。路面からは常滑焼甕 (45・46・48 ~ 50) や山茶碗 (47) のほか、山茶碗片・常滑焼片多数が出土した。

溝

SD01 南区の西拡張部分で確認された。幅 1.0 ~ 1.3 m の溝である。走行は正方位かわずかに東に振れる。深さは、北端で 0.6 m を測る。しかし、検出面が南に対して傾斜していくのに対し、底部は北側でほぼ平坦で、南側に向かってわずかに高くなるため、南端では深さ 0.3 m となる。底部には 2 箇所ほど楕円形の落ち込みが存在する。溝断面は深い皿状をなすが、流水と崩落により側壁が深くえぐられる箇所もあり、壁面は変化に富む。埋土下層の黒色粘質土層では調査時にも水が常に滲み出していた。この層を中心として山茶碗 (34・36), 土師器皿 (17) ほか、山茶碗片・土師器皿片・土師器鍋片等の遺物が出土した。

SD02 SD01 の東に芯々で 3 m 離れて並行する溝である。幅は 1.5 ~ 1.8 m を測る。断面は逆台形で、深さは北端で 0.65 m, 南端で 0.5 m である。こちらも底面には土坑状

の落ち込みがある。また、東側壁には楕円形で袋状の窪みも見られる。SD01 同様底面は地形に反して、わずかに南上がりである。最下層は礫を多く含む黒灰色粘質土で、こちらも水の滲み出しが著しい。この層を中心に山茶碗(31～35)、山皿(37～39)、鉢(42)、土師器皿(43)、土師質土鍋(44)、信楽焼(40)のほか、山茶碗片・土師器皿片・土師器鍋片・常滑焼片など多くの遺物が出土した。北面セクションでは、黒色土と暗茶褐色土が互層に堆積している状況が観察される。

SD03 調査区中央部の西壁寄りから表れ、直線的に南方向へ10m流れ、SX02に流れ込むように途切れる溝である。SX03には切られている。幅0.6～0.8m、深さ0.2mを測る。断面は逆台形で、埋土は黒色土である。遺物は山茶碗片・土師器皿片数点が出土した。その位置関係からSX02に流れ込む導水路とみられる。底面から検出されたp-9には完形の土師器皿(9)が埋納されていた。

SD04 調査区北西拡張トレンチで確認された。位置的にSD02の延長の可能性が高い。SD04-SD02は方位北からやや東に振れることになる。延長1.2m分しか確認していないが、幅1.0m、深さは0.3～0.4mを測る。底面に0.1～0.2mの土坑状の掘り込みが見られる。溝埋土はしまりの無い暗褐色土で、土坑状の掘り込みには黒灰色粘質土の堆積が見られる。出土遺物としては山茶碗(12・13)がある。対応するもう1条の溝は検出されなかった。

SD05 同じく北西拡張トレンチで確認された。幅0.7m、深さ0.1～0.15mを測る。方位はほぼSB01に平行するが、北寄りでは東に振れている。埋土は黒ボクに近い暗褐色土である。遺物は山茶碗片・土師器皿片・土師器鍋片数点が出土した。規模と位置から見てSD03に対応するか。

SD06 調査区の南東隅を流れる溝である。当初は大溝として一括していたが、調査区東壁のサブトレンチでSD07と切りあうことが判明した。SD06は延長9.5mを検出した。幅は上面で最大4m、下層では2.0～2.6mを測る。深さはSF01上面から0.8m～1.0mである。上層は黒褐色土で焼土や炭を含む。上層から山茶碗(28)、山皿(29・30)等が出土したが、量的には多くない。下層は、水を含んだ黒灰色粘質土・黒色強粘質土である。湧水が著しいためサブトレンチを入れたのみで掘削を止めた。

SD07 SD06の調査区東壁サブトレンチにおいて確認された。調査区の南端にかかるため幅は不明である。1m以上掘ってもまだ底に達しなかった。自然流路本体であるかもしれない。中層の黒色粘質土層はSD06の埋土を覆っていて、SD06埋没後もSD06上面も含めて機能していたことがうかがえる。こちらも下層では湧水が著しい。

SD08 SD02とSX01を結ぶ水路である。幅0.5m、延長2.4m、深さはSX01側で浅く0.15m、SD02側で0.3mを測る。埋土は暗褐色砂質土・黒色土・暗茶褐色粘質土がブ

ロック状をなしている。遺物の出土は全く無い。SX01の排水路(水口)として機能したものであろう。

井戸

SE01 SX01の埋土を切って掘り込まれている。直径0.8m、深さ1.5mの素掘り井戸である。埋土は黒色土である。少量の山茶碗片・土師器鍋片が出土した。底部外縁に2個の礫が残るほかは、井筒らしき木質も見られない。壁面は底部まで粘質シルトであり、井戸として機能するのかが疑問であったが、降雨後には基盤層の境から水がしみだし溜まった。

SE02 SK11の肩を切って掘り込まれている。東西1.0m、南北0.95mの円形で、底面までの深さは1.5mを測る。検出面からほぼ1mのところを礫石による石組みが2～3段分みられる。以下は径が0.6mと狭まりここに井筒がはめ込まれていたと推定されるが、木質等の遺存は無かった。調査時でも石組みから下は常時水が溜まっていた。埋土はほぼ単純な黒色土である。山茶碗片・土師器皿片・土師器鍋片が少量出土した。

SE03 北西拡張区の端で検出された。東西1.7m×南北1.0m以上の円形で、深さは1mである。この深さで砂質土層に達して湧水する。地山が軟質なため下層の壁が崩落して袋状をなしている。おそらく素掘りで、利用期間も短かったと思われる。埋土は、黒色土と黄褐色地山土の互層となっている。

畦

SF01 SX01の西辺から南辺を囲う、基盤層を削り出して造られた大畦である。西辺では基盤層は黄褐色粘質土で、幅は2.2m、SX01底面からの高さは0.1～0.2mである。南辺では幅2.5m～1.2mである。南辺の基盤層は黄褐色粘質土の上面を0.1～0.3mの自然堆積の黒色土(クロボク)が覆っている。SX01底面からの高さは調査区東端のセクションで0.25mである。

土坑

SK01 東西1.3m×南北1.1m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。埋土は暗褐色土で2層に分かれる。中央北寄りに上層からの掘り込みが見られる。少量の山茶碗片・土師器鍋片が出土している。

SK02 南北2.05m×東西1.5m、深さ0.3mの隅丸方形の土坑である。西側をSD05に切られている。埋土は黒色土の単層で、出土遺物はほとんど無い。

SK03 調査区の西辺にかかり全体形は不明である。不整形な土坑である。南北2.2mで、深さ0.1mと浅い。埋土は黒色土である。ごく少量の土師器皿片・土師器鍋片が出土した。

SK04・05 直径0.7m×深さ0.25mの円形の土坑2基が重複している。切り合い関係はSK04のほうが新しい。埋土は、黒色土に地山土ブロックと炭を含む。山茶碗片・土

師器皿片・土師器鍋片が出土した。

SK06 直径 0.6 m, 深さ 0.1m の円形土坑である。埋土は黒色土である。細かい山茶碗片・土師器皿片・土師器鍋片が出土した。

SK07 直径 0.65 m, 深さ 0.1m の円形土坑である。埋土は黒色土である。山茶碗片・常滑焼片・土師器皿片が出土した。

SK08 直径 0.45 m, 深さ 0.1m の不整な円形土坑である。SB02 の p-34 を切っている。埋土は黒色土である。

SK09 南北 2.9 m×東西 1.85 m, 深さ 0.2 m の隅丸方形の土坑である。埋土は上層が暗茶褐色土, 下層が黒色土に地山土が混じる層である。山茶碗片・土師器皿片・土師器鍋片等比較的多くの遺物が出土した。しかし, 凶化できるものとなると試掘時に上面から出土した山茶碗 (22) のみである。

SK10 南北 0.55 m×東西 0.4m, 深さ 0.3m の楕円形土坑である。SK09 に切られている。埋土は上層が暗茶褐色土, 下層が黒色土である。

SK11 大部分は調査区外に出ているが, 南北 8.3m×東西 5.5m, 深さ 0.1 m の方形の土坑である。埋土は茶褐色土で, 地山土ブロックが混じる。

SK12 SK21 の底部から検出された。東西 1.45 m×南北 6.5 m, SK21 の底面からの深さ 0.1 m の長方形の土坑である。埋土は上層が暗茶褐色土, 下層が黒色土である。少量の山茶碗片・土師器皿片・土師器鍋片を含む。

SK13 東西 3.5m×南北 2.4 m, 深さ 0.05 m の方形土坑である。南半は削平され消えてしまっている。埋土は暗茶褐色土である。埋土は薄い土師器皿片・土師器鍋片・山茶碗片等を多く含む。

SK14 SX02 の北辺に沿って掘られた土坑群の 1 つである。東西 1.4 m, 南北 0.6 m の長楕円形の土坑である。2 段に掘られ両端は深さ 0.1m と浅く, 中央は 0.4m と深い。埋土は粘質の黒色土である。土師器皿片が出土した。

SK15 SK14 の西に隣接する。東西 1.1 m, 南北 0.6 m の長楕円形の土坑で, 深さは 0.4 ~ 0.45m である。埋土は粘質の黒色土である。山茶碗・土師器皿の破片が少量出土した。

SK16 SC01 が調査区南壁に突き当たる部分で, SC01 の路盤や SD01・SD02 埋土を切って掘り込まれた土坑である。東西 3.9 m×南北 1.6 m の不整な楕円形である。SC01 の路盤からの深さは 0.2 ~ 0.3 m である。埋土は暗茶褐色粘質土である。山茶碗片が出土している。SD01 寄りに, この埋土を切って東西 1.7 m の隅丸方形の掘り込みがある。地山土ブロックを多量に含む暗灰色土で埋め戻されている。

SK17 SX02 の北辺に沿って掘られた土坑群の 1 つである。東西 0.9 m×南北 0.4 m, 深さ 0.4m の長楕円形の土

坑である。埋土は粘質の黒色土である。口縁の一部を欠くのみ山茶碗 2 点 (1・2) が出土した。意図的に埋納されたものか。

SK18 SX02 の北辺からやや内側に掘られている。東西 1.1 m×南北 0.5 m, 深さ 0.3m の長楕円形の土坑である。埋土は粘質の黒色土である。

SK19 東西 1.3m×南北 1 m, 深さ 0.1 m の方形の土坑 SK19-1 と東西 0.85 m×南北 1.05m, 深さ 0.1 m の楕円形土坑 SK19-2 が重なり合う土坑群である。切りあい関係では SK19-2 が新しい。埋土は暗褐色土である。山茶碗片・土師器皿片を出土した。

SK20 SK21 と重複する東西 2.85 m×南北 1 m, 深さ 0.05m の溝状の土坑である。SK21 との切り合い関係は, 埋土が薄く, 色調も似ているため判断できなかった。埋土は明褐色土である。山茶碗片・土師器皿片・土師器鍋片が出土した。

SK21 東西 3.9 m×南北 3.2m, 北辺で深さ 0.1 m の方形土坑である。埋土は明褐色土である。青磁片 (8) が出土したほか, 山茶碗片・土師器皿片・土師器鍋片等が比較的多く出土した。

SK22 SD02 の底部に掘られた土坑である。湧水と埋土が黒色土で区別がほとんどつかないことから SD02 との切り合い関係は判断できなかった。東西 0.85 m×南北 0.8 m, 深さ 0.2 m の不整な円形土坑である。完形の土師器 (3), 山茶碗 (4・5) が出土した。溝がある程度埋まってから水溜や井戸として利用されたものか。

水田

SX01 規模は西側で南北 10m×東西 21 m 以上の土坑状の落ち込みである。東側では, SD06・SD07 に制約されて徐々に狭まり約 5.6 m となりている。結局, 五角形状の平面を呈すると見られる。SF01 からの深さは 0.2 m である。底面は, 粘質の黄色土が全面に現れている。底面の基盤層には鋤先痕と見られる痕跡が列を成しているのが多数観察できる。西辺には掘り込みに沿って巡る溝状遺構が見られる。埋土は黒色土である。粘りは地山のクロボクほどさらさらしていないが, 強粘質というほどでもない。山茶碗 (25 ~ 27), 山皿 (14 ~ 16) ほか, 山茶碗片・山皿片・土師器皿片・土師器鍋片を多く含むほか, 鉄滓なども出土している。SD08 で SD02 とつながっている。

SX02 SX01 を北に 3.2 m 拡張している。底面は 0.03 ~ 0.05 m ほど高くなるが, 大きな変化はない。埋土は黒色土で山茶碗片・土師器皿片・土師器鍋片少量出土した。北辺に沿って, 溝状遺構と SK14・SK15・SK17 等の土坑群が連なる, 深いものは深さ 0.4 m で袋状, 浅いものは深さ 0.1 m 前後で比較的広く不整形である。SD03 が流れ込み, 西辺に沿う。

SX03 SX02 をさらに 2 m ほど拡張している。底面は

SX02 に対し 0.15m とやや高まる。北側の地山からの掘り込みの深さは 0.05 m～0.1 m 程度である。埋土は黒色土である。

SX04 調査区南部西端に部分的に現れている。全体規模

IV. まとめ

掘立柱建物 調査区の北側には主屋と思われる総柱掘立柱建物が所在する。副屋（納屋）を伴うか否かは調査区に限りがあり不明である。SB02 は 4 間×4 間、SB03 もおそらく同規模であろう。SB01 は 3 間×3 間で、やや方位が東に振れる。柱穴の切り合い関係が無いため建物の新旧は不明であるが、主屋はほぼ同一箇所ですべて建て替えられていることになる。建物の時期は SB02 の p-34 出土の山茶碗が唯一の判断材料である。藤澤編年の 6 型式の様相を留めているようなので 13 世紀前半代という年代が得られる。また、周辺の遺構から出土した遺物から見ると大部分が同編年の 7 型式に該当し、6 型式のものが若干あり、8 型式に降るものは僅かである。よって、この住居はほぼ 13 世紀代を通して営まれ、14 世紀代に入る頃移転してしまふと考えられる。

水田 調査着手時には全くその存在を想定していなかったため、重機で埋土の大部分と大畦の上面を削平してしまった。SX01 埋土のレベルまで掘り下げて、ようやく用排水路とみられる大溝 SD01・SD02、大畦 SF01、水口と見られる溝 SD08 を確認したことから、SX01 が水田遺構である可能性に気づいた。SX01～SX03 埋土の科学分析結果からも、この遺構群が水田であると考えて良いようである。

初期の水田 SX01 は、南北 10m×東西 21 m 以上の隅丸方形の土坑状の落ち込みである。東南側では流路に制約されて狭まり、五角形状を呈する。水持ちを考えてか、南東部の自然堆積のクロボクが無くなって黄色粘質土層の上面に達するまで水平に掘り下げて、基底面としている。

第二次調査の結果からも、流路に沿ってこのような隅丸方形の水田が縦列して連なっていると考えられる。このような水田開発の例はあまり類を見ず興味深い。

開発の時期は、SX01 の地山直上から出土した山皿等が、藤澤編年の 7 型式の範疇におさまるもので、13 世紀前半から中葉にかけて耕作されていたと考えておきたい。

SX02・SX03 は SX01 をベースにしつつも徐々に北側に幅を広げ、かつ低面の高さを上げていっている。可耕範囲を少しでも広く確保しようとする意欲の表れとともに、周辺の開発が進んだため土砂の流入が増え流路の水面が上昇してきたことも要因と思われる。

方形土坑 住居と水田の間には空地地があり、方形の浅い土坑 SK11・SK13・SK21 が検出された。基盤層が全体に削平を受けているので、遺構の深い部分のみ残り、消失し

は確認できないが、底部に大小の小土坑状の掘り込みがあり、SX01～03 の周辺部分と似ているため、西側に存在する同様の遺構の東端と考えておきたい。

たものも多いだろう。埋土の状況が、通常の土坑が黒色土・暗褐色土で単純に埋まっているのに対し、比較的明るい褐色土で、堆積も層状ではなくブロック状に地山土などが混じっている。何度も土が入れ替えられ混ぜられたことを示すと考える。水田と住居の間という立地からみて、蔬菜畑にともなう耕作痕の可能性が高いと判断している。しかし、調査時点ではそこまで考えが回らず、残念ながら埋土の自然科学分析は行わなかった。水田埋土の自然科学分析では、ソバの栽培の可能性が指摘されている。この畑以外にも、上位の段丘面などに畑が営まれていたのだろう。

地割溝 SD01・SD02 は用排水路を兼ねたほぼ南北に走る地割溝である。平成 8 年度に実施された第 2 次調査においても、東に約 80 m の地点で大溝 SD201 が検出されている。よって、竹野一丁目遺跡における宅地は旧流路の自然地形に従わず、南北溝により短冊状に区画されていたと言えるだろう。

河曲郡における鈴鹿川の谷底平野に施行された条里地割は他郡に例を見ない 1 町 120 m の広幅条里で、方位は竹野付近で N10° E である。竹野一丁目遺跡にすぐ隣接する竹野・野辺の集落内の道はその名残をよく留めている。にもかかわらず、検出された溝による地割はほぼ正方位でこれに従っておらず、別の基準により施工されている。

対して、三日市の段丘面の南方には金沢川による浅析谷が広がる。そこにはほぼ正方位で、120 m の広幅条里が施行されている。三日市南方の条里が河曲郡の他地区と全く異なり正方位を取ることは、『鈴鹿市史』によると「用水利水が困難であるため「条里施行が遅れたからでは」とされている。三斎市の商業活動から発達し、宗教的な拠点ともなる三日市を中心とした、中世初頭の盛んな動きと期を同じくして開発が進んだ可能性が高い。

竹野一丁目遺跡の地割も、こういった社会背景の影響を受けた可能性が考えられる。ただし、第 2 次調査区で検出された大溝 SD201 と SD01・SD02 の間隔は 79 m または 82 m である。地割を広幅条里に伴うものと仮定して坪内を長地型に割った 12 m の倍数とはならず、単純に条里地割と断定はできない。竹野一丁目遺跡の地割の実態を明らかにするには更なる調査の機会を待たざるを得ない。

最後に 今回の調査では、調査区が建物の基礎部分に留まり、680 m² とさほど広いものではなかった。しかし、幸運にも中世の屋敷地が調査区内にほぼ収まるように検出された。北の微高地には居宅としての総柱掘立柱建物が位置し、

その周辺には井戸や塵芥処理用とみられる土坑が分布している。南端には、崖に沿って湧き出す地下水によって生じた流路を利用した水田遺構が確認された。そして、住居と水田の間の空閑地には蔬菜畑と見られる遺構が残る。さらには、宅地はほぼ正方位の大溝で櫛状に区画されていることが判明した。

竹野一丁目の発見と調査は、鈴鹿市では初めてとなる中世の水田遺構が確認されたことも含め、中世初期の集落の様相を明らかにすることができ、鈴鹿川右岸の低位段丘面の開発について考える重要な手がかりを与えてくれた。

鈴鹿川右岸の低位段丘上にはこのような微地形を活用

して営まれた水田とそれに伴う小規模な集落が点在すると見られる。しかし、集落の継続期間が短いためか地表の遺物散布が比較的乏しいことや、すでに一帯の宅地化が進んでいることから遺跡発見の機会に乏しいのだろう。今後も、分布調査などで十分に注意を払っていく必要がある。

【参考文献】

仲見秀雄ほか 1980『鈴鹿市史 第一巻』鈴鹿市

藤澤良祐 1982「瀬戸古窯址群 I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 I』瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1994「山茶碗研究の原状と課題」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター

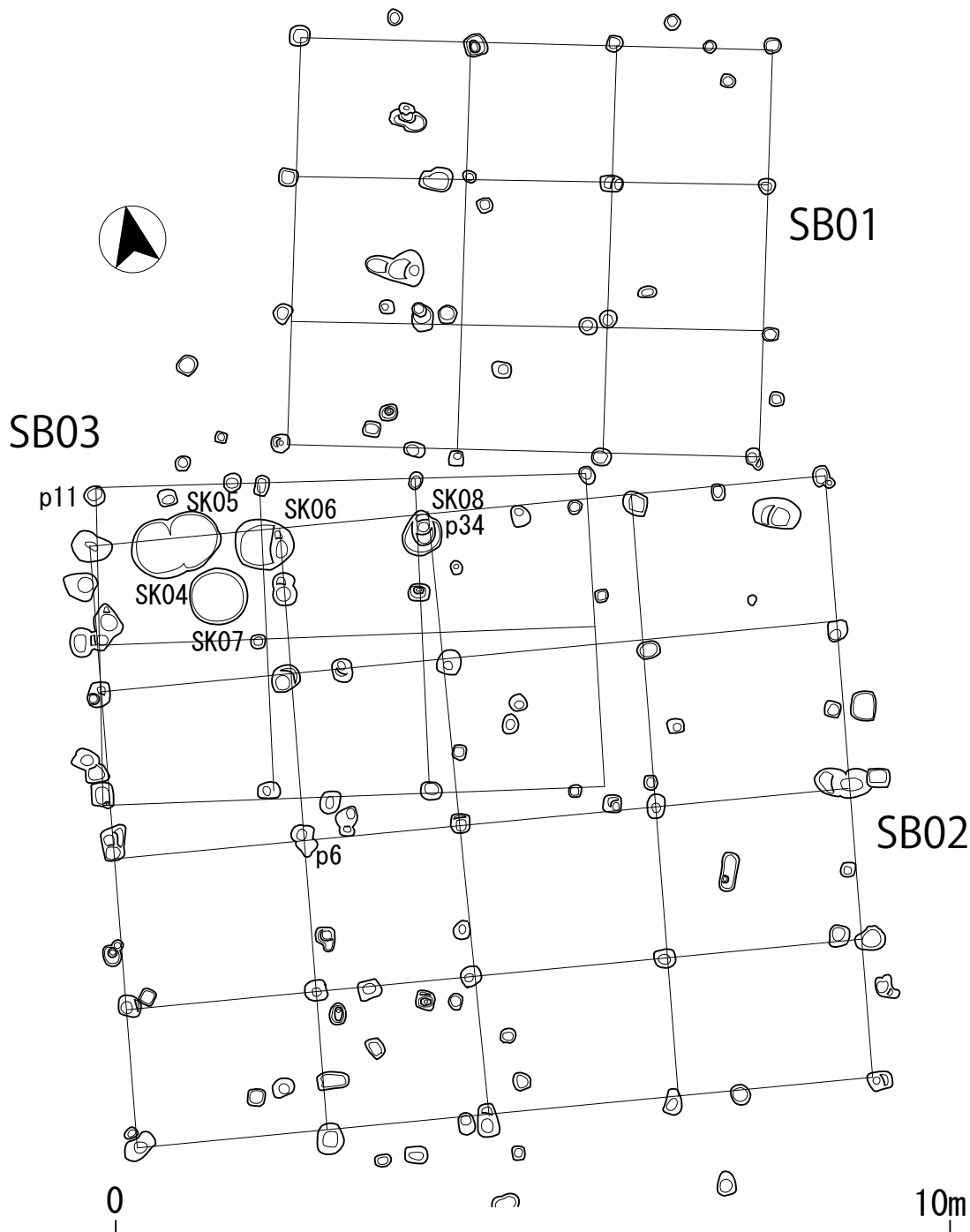


Fig.3 掘立柱建物 SB1・SB2・SB3 平面図 (1/80)

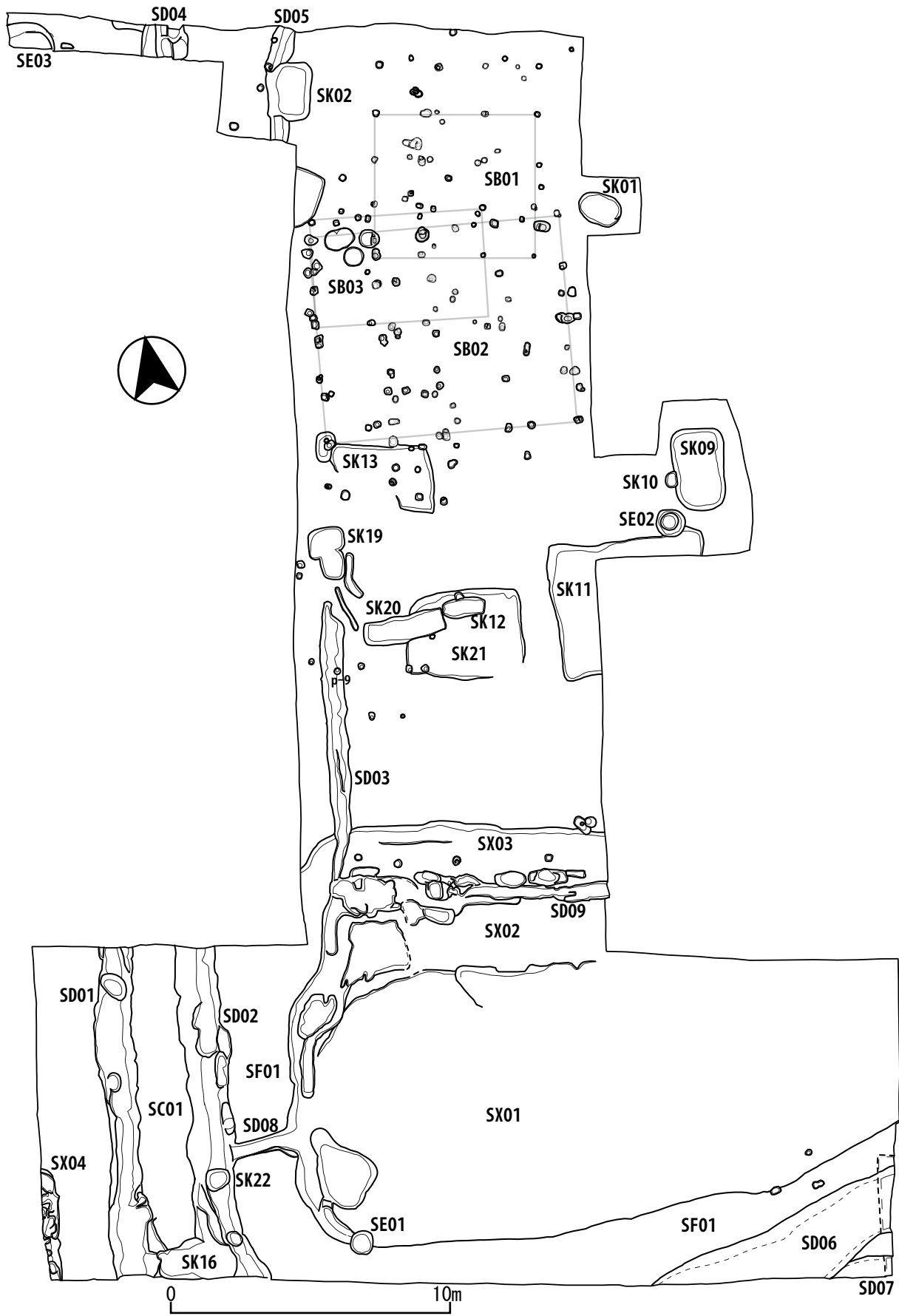


Fig.4 遺構配置図 (1/200)

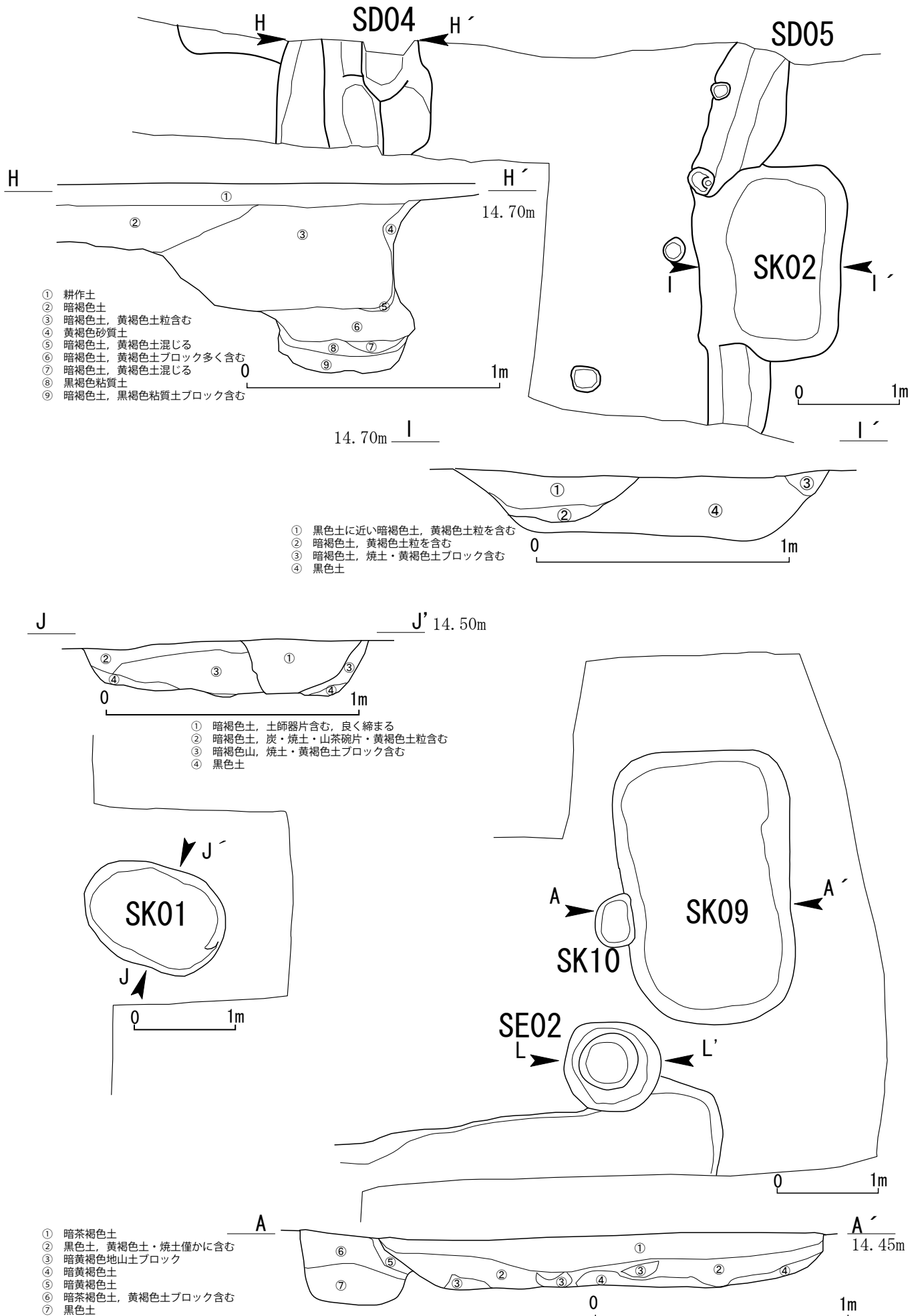


Fig.5 溝 SD04・SD05 土坑 SK01・SK02・SK09, (1/50) 同セクション図 (1/20)

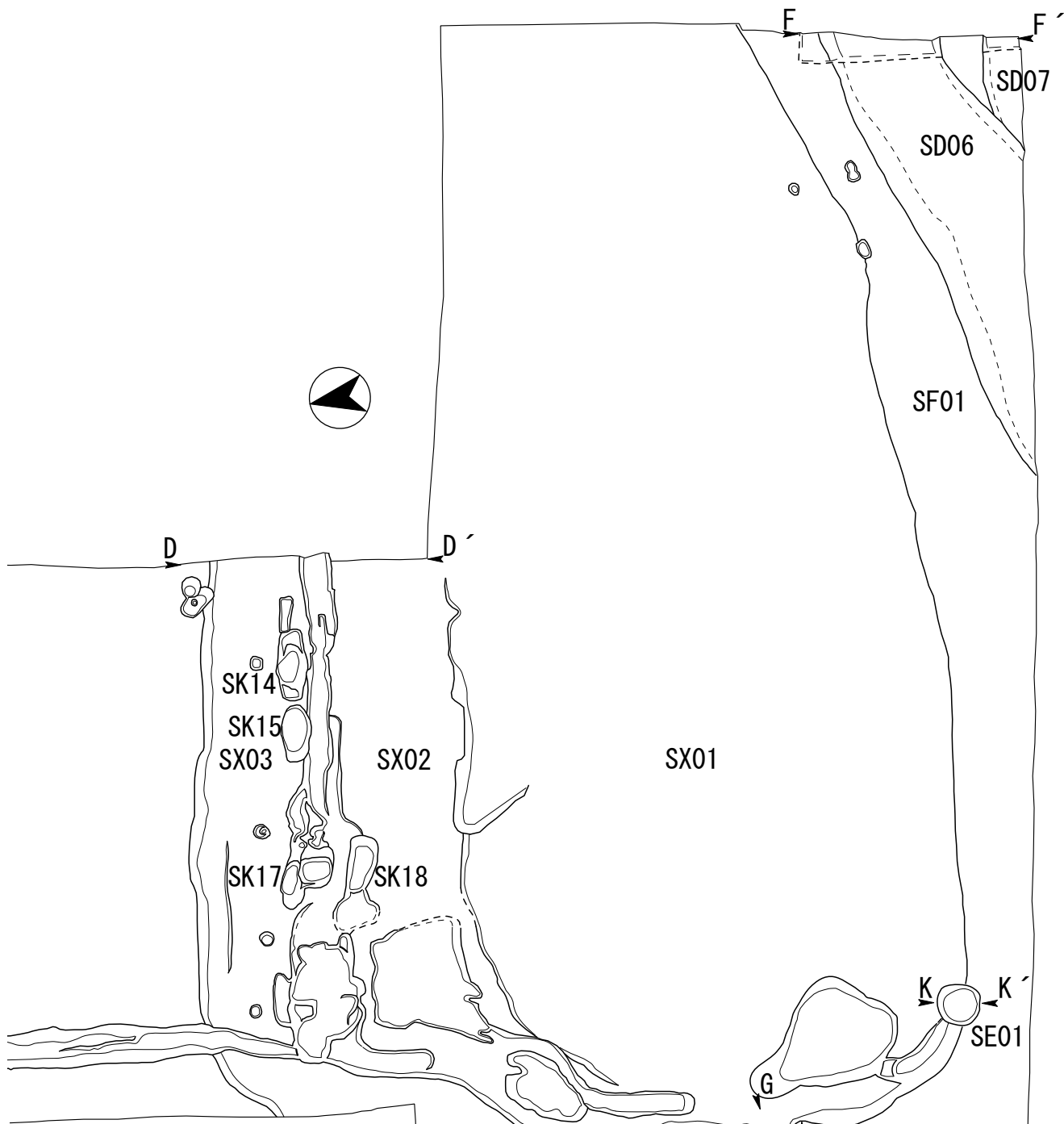


Fig.6 水田 SX01 周辺遺構配置図 (1/125)

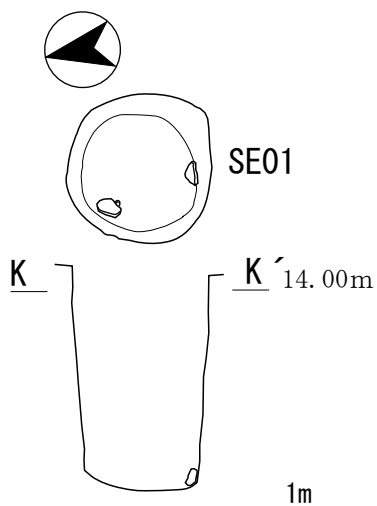
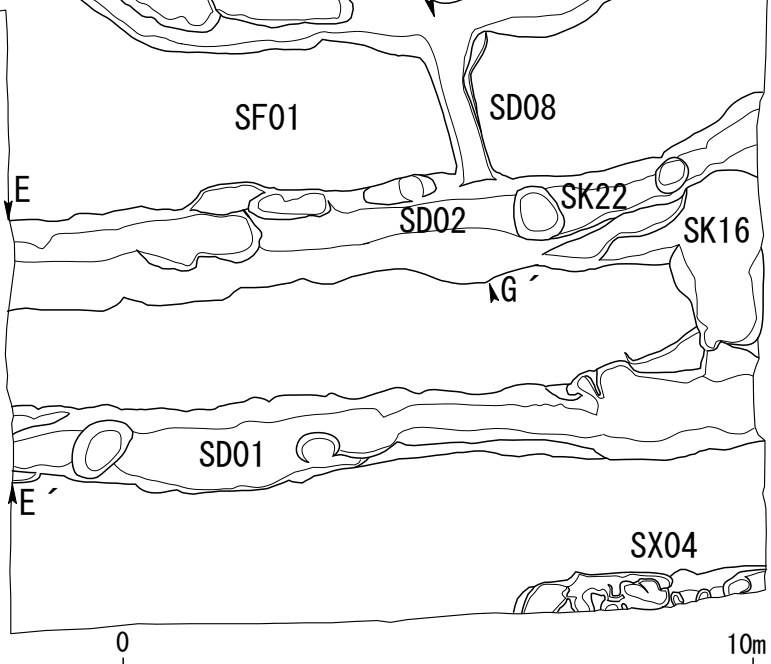
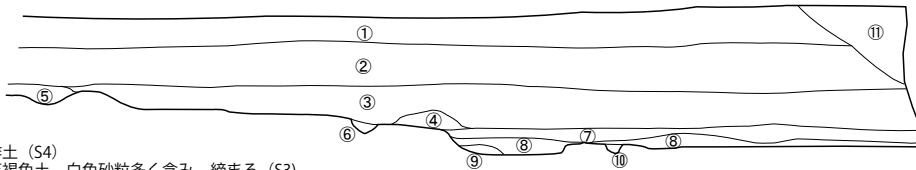


Fig.7 井戸 SE01 平面図・断面図 (1/25)



D

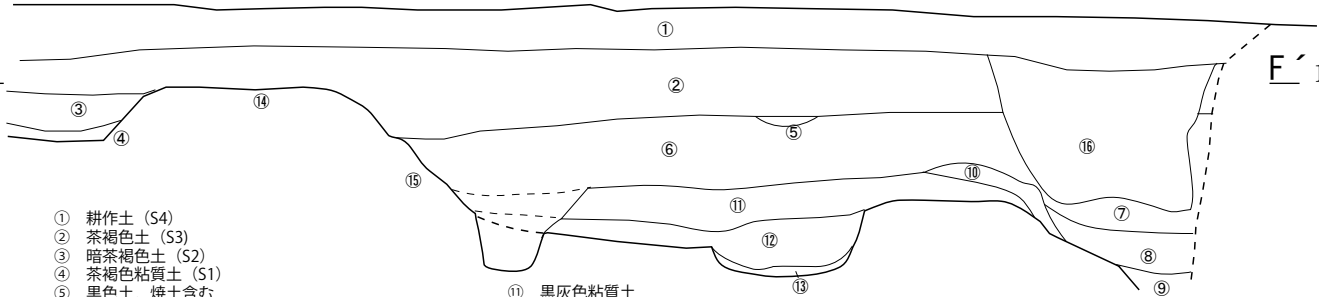
D' 15.0m



- ① 耕作土 (S4)
- ② 暗灰褐色土, 白色砂粒多く含む, 締まる (S3)
- ③ 黒褐色土 (S2)
- ④ 黒色土
- ⑤ 黒色土, 黄褐色土含む
- ⑥ 黒色粘質土
- ⑦ 黒色土, 黄褐色土細粒多く含む (S2)
- ⑧ 黒色土 (S1)
- ⑨ 黄褐色土ブロック
- ⑩ 黄褐色土, 黒色土僅かに含む
- ⑪ 攪乱

F

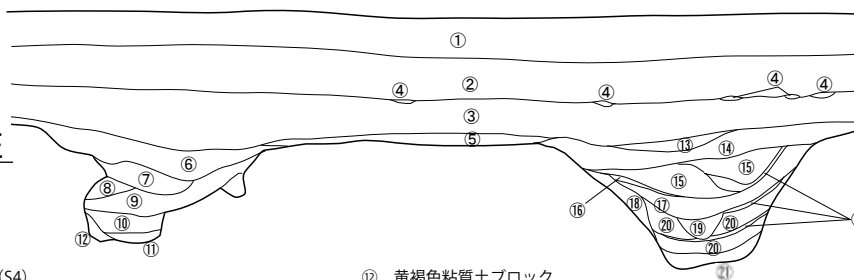
F' 14.0m



- ① 耕作土 (S4)
- ② 茶褐色土 (S3)
- ③ 暗茶褐色土 (S2)
- ④ 茶褐色粘質土 (S1)
- ⑤ 黒色土, 焼土含む
- ⑥ 暗茶褐色土, 炭・焼土・黄褐色土ブロック含む
- ⑦ 黒色粘質土
- ⑧ 黒色粘質土, 砂・礫含む
- ⑨ 黒色粘質土
- ⑩ 黒色粘質土
- ⑪ 黒灰色粘質土
- ⑫ 黒色強粘質土
- ⑬ 茶褐色砂質土
- ⑭ 黒色土 (S0b)
- ⑮ 黄褐色粘質土 (S0a)
- ⑯ 攪乱

E

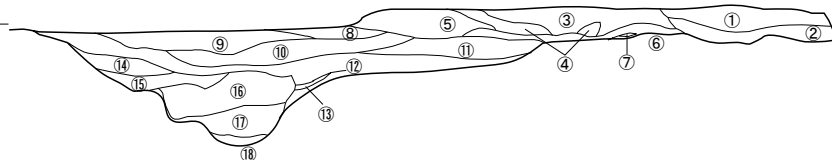
E' 14.0m



- ① 耕作土 (S4)
- ② 茶褐色土, 白色砂粒を含む (S3c)
- ③ 暗茶褐色土 (S3a)
- ④ 黒色土 (S3b)
- ⑤ 暗茶褐色土, 黒色土ブロック混じる
- ⑥ 暗茶褐色土, 黄褐色土ブロック混じる
- ⑦ 黒色土
- ⑧ 茶褐色土, 黄褐色土ブロック含む。
- ⑨ 暗褐色土, 黄褐色土ブロック含む
- ⑩ 黒色粘質土
- ⑪ 黄褐色粘質土
- ⑫ 黄褐色粘質土ブロック
- ⑬ 暗茶褐色土
- ⑭ 茶褐色土, 黄褐色土細粒含む
- ⑮ 茶褐色土, 黄褐色土細粒極めて多い
- ⑯ 黒色土
- ⑰ 茶褐色土, 黄褐色土ブロック多い
- ⑱ 黄褐色土ブロック
- ⑲ 黒灰色粘質土
- ⑳ 暗茶褐色土, 黄褐色土ブロック (大) 多く含む
- ㉑ 黒灰色粘質土, 礫を多く含む

G

G' 14.0 m



- ① 黒灰色粘質土
- ② 暗茶褐色土
- ③ 暗茶褐色土, 黄褐色土粒多く含む
- ④ 暗茶褐色粘質土
- ⑤ 暗茶褐色土, 黄褐色土粒多く含む
- ⑥ 黒色土
- ⑦ 黒色土
- ⑧ 暗茶褐色土
- ⑨ 茶褐色砂質土, 黄褐色土粒極めて多く, 礫を含む
- ⑩ 黒色土
- ⑪ 暗褐色砂質土, 黒色土ブロック含む
- ⑫ 黄褐色砂質土
- ⑬ 黒色土
- ⑭ 黒色土
- ⑮ 黒色砂質土
- ⑯ 暗茶褐色粘質土
- ⑰ 黒色粘質土
- ⑱ 黄色粘質土

0 1m

Fig.8 水田 SX01 ~ 03・溝 SD01・02・溝 SD01・02・08 セクション図 (1/25)

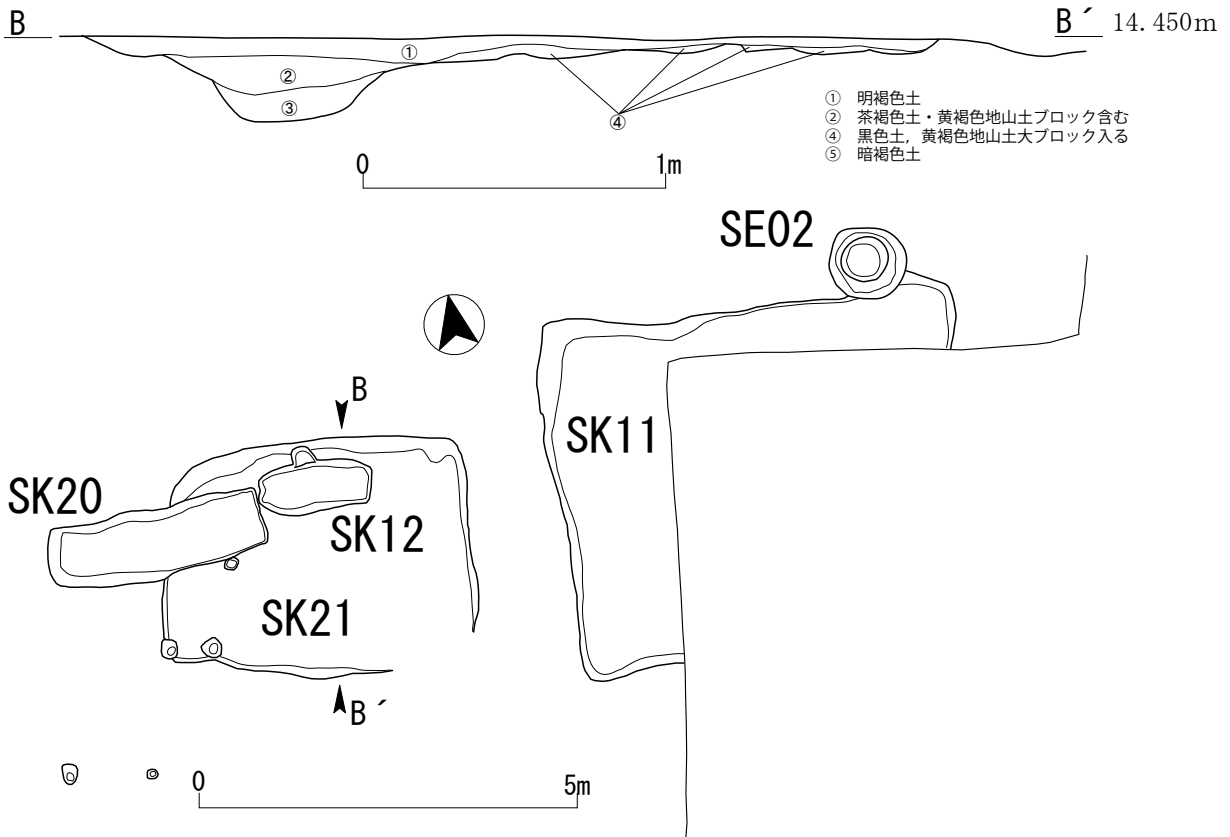


Fig.9 土坑 SK11・SK12 平面図 (1/100) 同セクション図 (1/25)

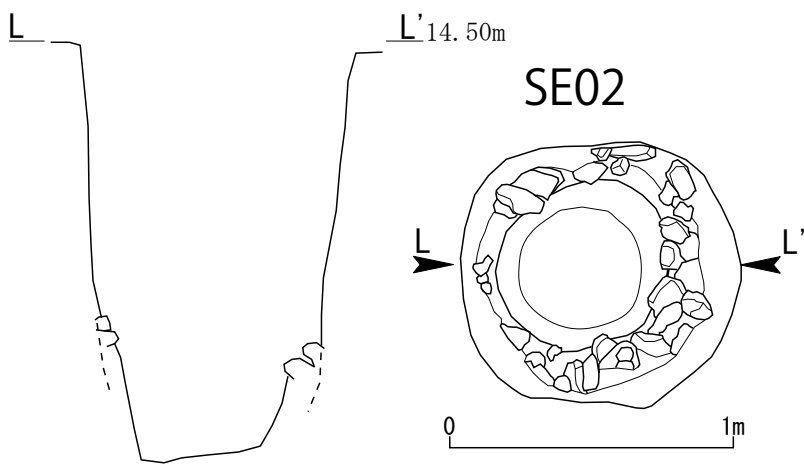
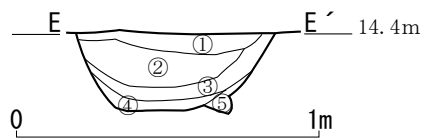


Fig.10 井戸 SE02 平面図・同セクション図 (1/25)



- ① 茶褐色土, 黄褐色土細粒含む
- ② 黒色土
- ③ 暗茶褐色粘質土, 黄褐色土含む
- ④ 黄褐色粘質土, 黒色土含む
- ⑤ 黄褐色粘質土

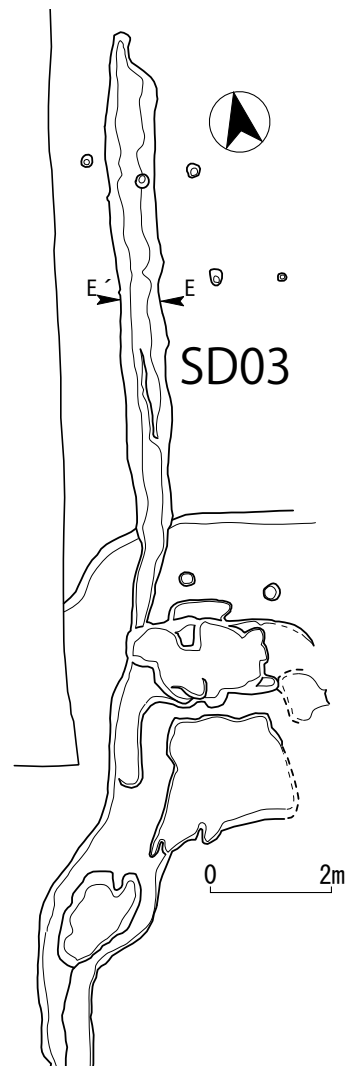


Fig.11 溝 SD03 平面図 (1/100) 同セクション図 (1/25)

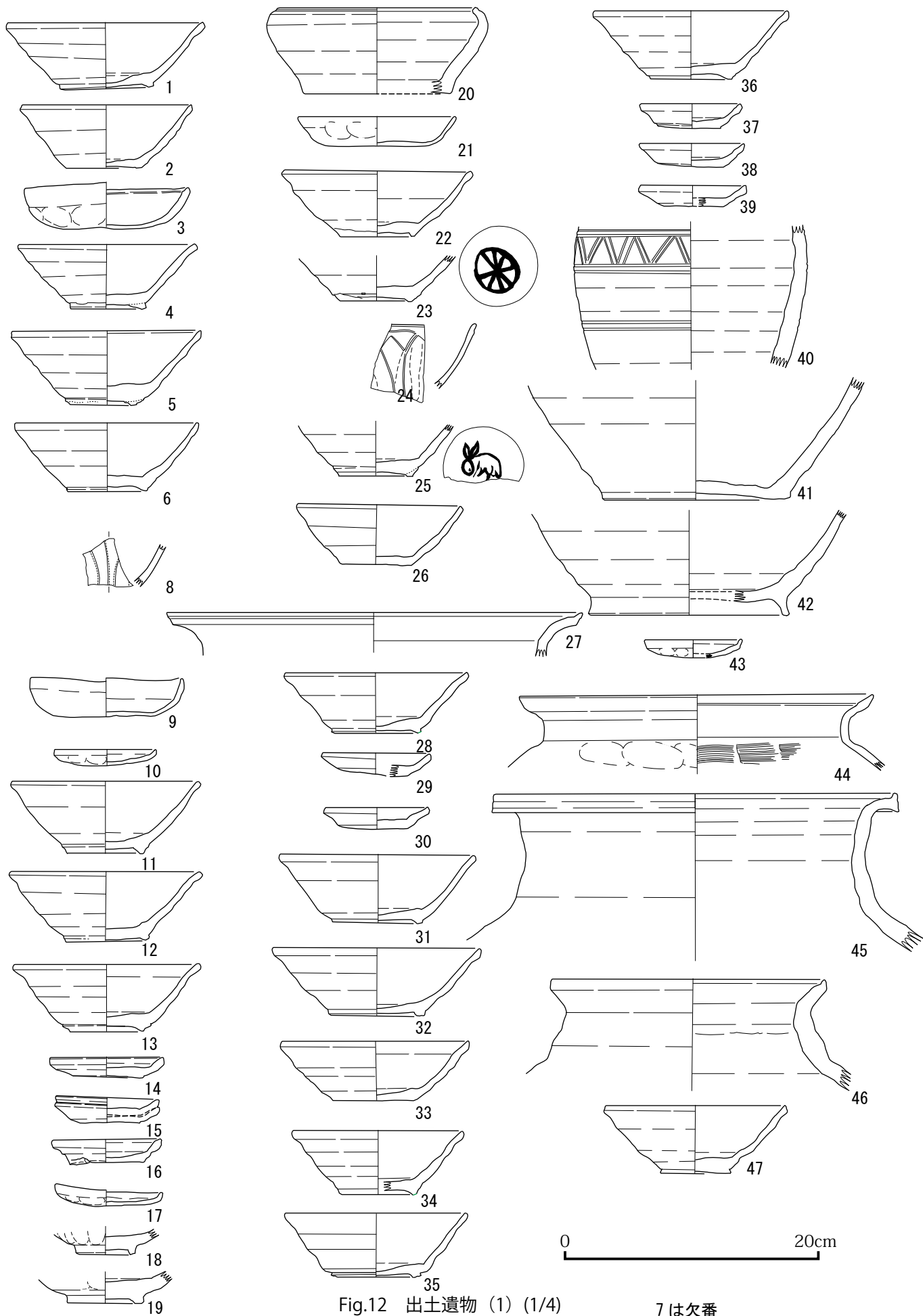


Fig.12 出土遺物 (1) (1/4)

7は欠番

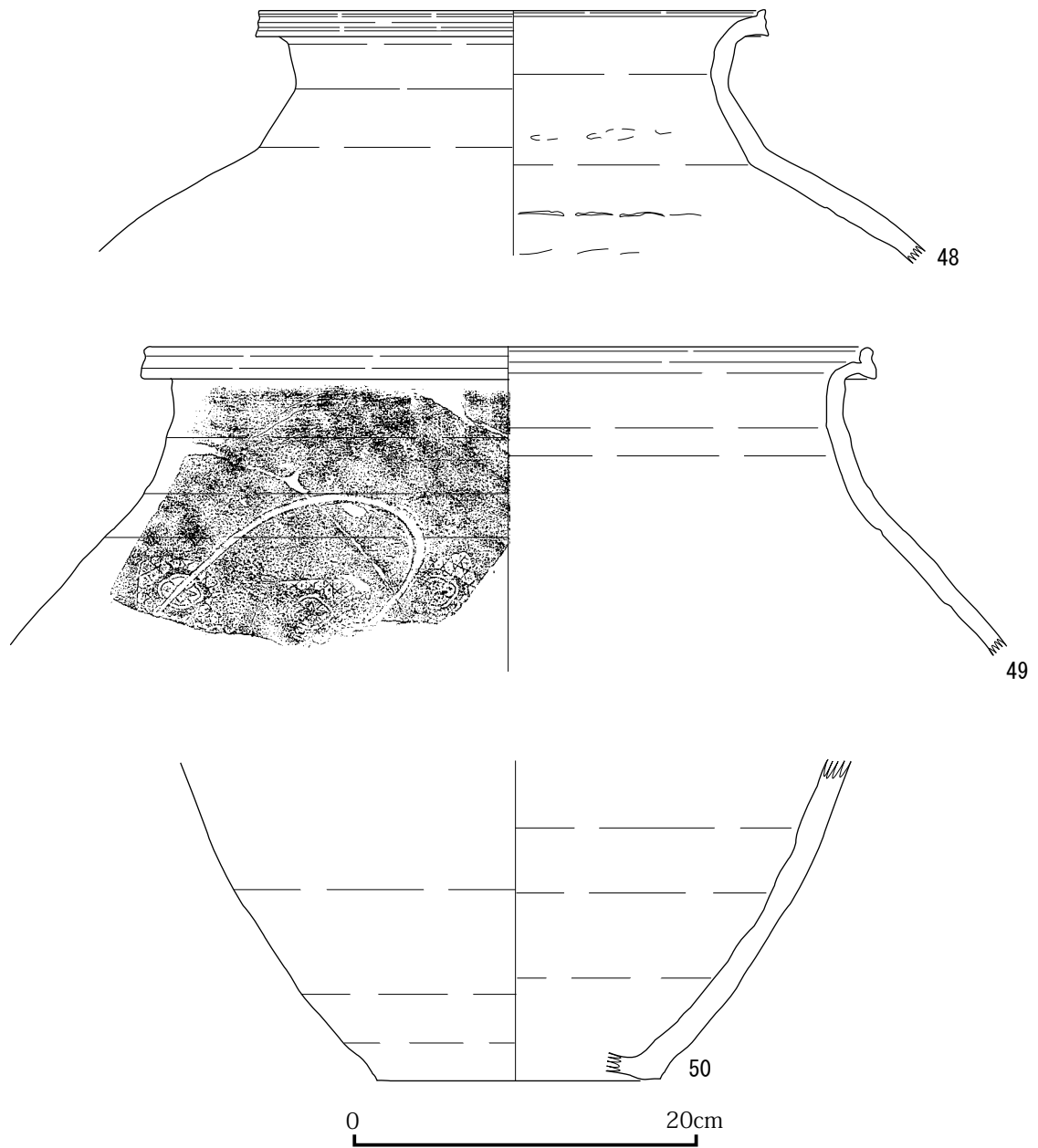


Fig.13 出土遺物 (2) (1/4)

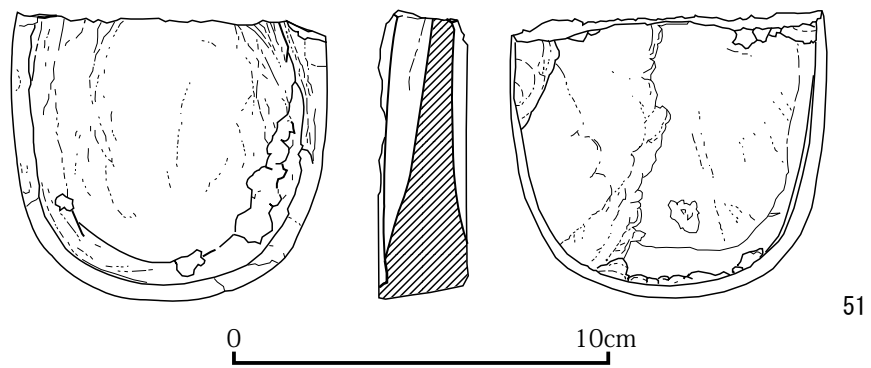


Fig.14 出土遺物 (3) (1/2)

番号	種別	器種	出土位置	調整・技法の特徴	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	残存	胎土	焼成	色調	備考
1	山茶碗	碗	SK17	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	153	73	50	口縁 3/4	良	良	灰白	1/2 に煤付着
2	山茶碗	碗	SK17	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	133	60	49	口縁 8/7	白色砂粒多い	良	灰白	
3	土師器	皿	SD02 内 SK22	口縁ヨコナデ, 内外面指ナデ	130	70	34	完	良	良	浅黄橙	底部に穿孔
4	山茶碗	碗	SD2 内 SK22 上 面	内外面口クロナデ	138	59	50	完	白色砂粒多い	良	灰白	内面 1/4 に煤付着
5	山茶碗	碗	SD2 内 SK22 上 面	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	14.8	55	56.5	完	砂粒多い	良	明褐灰	内外面に煤付着, 高台 1/2 剥落
6	山茶碗	碗	SK18	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	(14.7)	54	57	口縁 1/4	白色砂粒多い	良	灰白	
8	青磁	碗	SK20or21		-	-	-	胴部破片	良	良	灰オリーブ	蓮弁文
9	土師器	皿	SD03 内 p-9	口縁ヨコナデ, 内外面指ナデ	118	81	30	完	良	良	灰白	底面に板圧痕
10	土師器	小皿	SK04	口縁ヨコナデ, 内外面指ナデ	80	50	13	口縁 2/3	良	良	橙	口縁ゆがみあり
11	山茶碗	碗	SK08 p	内外面口クロナデ	(146)	80	56	口縁 1/2	良	良	褐灰	内外面とも煤付着
12	山茶碗	碗	SD04	内外面口クロナデ	(149)	66	54	口縁 1/2	白色砂粒多い	噴出し 多い	灰白	内面体部, 口縁に自然釉 厚く付く
13	山茶碗	碗	SD04	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	(145)	56	52	口縁 1/3	白色砂粒多い	良	灰白	器面粗い
14	山茶碗	小皿	SX01 地山直	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	88	56	15	完	良	良	褐灰	
15	山茶碗	小皿	SX01 地山直	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	81	47	22	口縁 5/6	良	良	灰白	2 枚が融着, 口縁部に自然 釉厚く付く
16	山茶碗	小皿	SX01	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	84	57	19	口縁 2/3	良	良	灰白	口縁に自然釉付着
17	土師器	小皿	SD01(S)	口縁ヨコナデ, 内外指ナデ 底部指オサエ	83	60	13	完	良	良	浅黄橙	底面に鉄分厚く付着
18	青磁	碗	SX01	底面ケズリ	-	46	-	底部完	良	良	緑灰	釉薬厚い, 蓮弁文
19	青磁	碗	SX01	底面ケズリ	-	(59)	-	底部 1/4	良	良	オリーブ黄	釉薬薄い, 蓮弁文
20	常滑焼	鉢	SX01	内外面口クロナデ	(154)	115	(71)	口縁 1/4	良	良	暗赤褐色	
21	土師器	皿	Tr2	口縁ヨコナデ, 内面指ナデ 外面指オサエ	(122)	80	25	口縁 1/3	良	良	淡橙	極めて薄手
22	山茶碗	碗	Tr1・ SK09 検	内外面口クロナデ・底面糸切り痕	(145)	57	54	口縁 1/4	白色砂粒多い	良	灰白	
23	山茶碗	碗	S 包	内外面口クロナデ	-	56	-	底部完	良	良	灰白	底面に車輪状の墨書
24	青磁	碗	包含層		-	-	-	口縁 1/16	良	良	オリーブ灰	蓮弁文
25	山茶碗	碗	SX01	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	-	57	-	底部 2/3	良	良	灰白	底面に兔の墨書
26	山茶碗	碗	SX01	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	127	55	46	ほぼ完	良	良	灰白	底面に「よね」? の墨書
27	常滑焼	甕	SX01	内外面口クロナデ	(326)	-	(33)	口縁 1/16	良	良	灰赤色	
28	山茶碗	碗	SD06 検	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	(142)	(66)	47	口縁 1/8	良	良	灰白	高台部分的に剥落, 外面 自然融
29	山茶碗	小皿	SD06 検	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	83	52	16	口縁 1/2	良	良	灰白	
30	山茶碗	小皿	SD06 検	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	80	51	16	口縁 1/3	良	良	灰白	
31	山茶碗	碗	SD02(N)	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	(150)	(70)	53	口縁 1/6	良	良	灰白	底面煤付着
32	山茶碗	碗	SD02	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	(158)	74	52	口縁 1/6	良	良	灰白	外面鉄分付着
33	山茶碗	碗	SD02	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	(145)	62	46	口縁 1/4	良	良	灰白	外面口縁鉄分付着, 胴部・ 底部煤付着
34	山茶碗	碗	SD01(N)	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	(131)	(60)	50	口縁 1/6	白色砂粒多い	良	灰	口縁部内面自然釉
35	山茶碗	碗	SD02(N)	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	(141)	(70)	49	口縁 1/4	白色砂粒多い	良	灰白	高台 1/2 潰れて帯状
36	山茶碗	碗	SD01(S)	内外面口クロナデ	(150)	64	53	口縁 1/3	良	良	灰白	
37	山茶碗	小皿	SD02(N)	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	77	49	19	口縁 3/4	良	良	灰白	口縁自然釉付着
38	山茶碗	小皿	SD02 下	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	81	51	18	完	良	良	灰白	口縁 1/2 自然釉付着
39	山茶碗	小皿	SD02(S)	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	(82)	(46)	16	口縁 1/3	良	やや軟	灰	
40	信楽焼	壺	SD02(N)	内外面口クロナデ	-	-	-	胴部 1/4	良	良	灰白	外面自然釉, 荒れた肌 肩に鋸歯文
41	常滑焼	甕	SD02	内外面ケズリ, 内面底部ナデ, 底 面砂圧痕	-	140	-	底部 2/3	良	良	外面灰白, 内面暗赤褐	内面底部自然釉厚く付着
42	山茶碗	鉢	SD02 下	内外面口クロナデ, 底部ナデ	-	(156)	-	底部 1/4	良	良	灰白	内面煤付着
43	土師器	小皿	SD02(S)	口縁ヨコナデ, 内面ナデ, 底部指 オサエ	(76)	(34)	14	口縁 1/2	良	良	内面橙 底面褐灰	
44	土師器	鍋	SD02	口縁ヨコナデ, 内外面ヨコハケメ,	(273)	-	-	口縁 1/3	良	良	灰白	内外煤付着
45	常滑焼	甕	SC01	内外面ヨコナデ	(314)	-	-	口縁 1/6	良	良	にぶい褐色	口縁内面 肩部自然釉付着
46	常滑焼	壺	SC01	内外面ヨコナデ	(213)	-	-	口縁 1/4	白色砂粒多い	噴出し 膨れ有	にぶい赤褐	口縁内面, 外面自然釉薬 厚く付く
47	山茶碗	碗	SC01	内外面口クロナデ, 底面糸切り痕	(140)	55	53	口縁 1/6	白色砂粒多い	良	灰白	外面, 底部内面に煤付着
48	常滑焼	甕	SC01	口縁部, 内面ヨコナデ, 肩部板状工具によるオサエ	(291)	-	-	口縁 1/8	白色砂粒多い	良	灰褐	外面肩自然釉厚く付着
49	常滑焼	甕	SC01	口縁部, 内面ヨコナデ, 肩部ナメナデ	(416)	-	-	口縁 1/6	良	良	灰赤	肩部に「つ」状の篋書き, 「篋目に花菱」押印文
50	常滑焼	甕	SC01	外面縦方向の板ナデ, ナデ消し, 内面板ナデ, 底部砂圧痕	-	(164)	-	底部 1/4	良	良	暗赤灰	自然釉底部まで垂れる
51	石硯		包含層	外周丁寧な削り, 陸部に線状痕多 い	(7.5)	8.2	2.3	1/2			緑灰色	砂岩製?

7 は欠番 数値の () は折り返しによる復元

Tab.1 実測遺物観察表



調査区全景 (北から)



水田遺構 (北西から)



SD01・SD02(北から)



SB01(南から)



SB02(南から)



SD01・SD02 検出状況(南から)



SD01・SD02 掘削作業風景(南から)



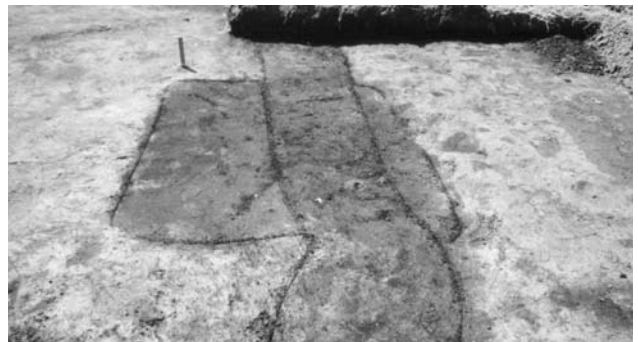
SD01・SD02(南から)



SD03(北から)



SD04(南から)



SD05・SK02 検出状況(北から)



SD06・SD07 検出状況(西から)



SD06・SD07 セクション(西から)

Plate 3



SD08 検出状況 (西から)



SD08(南から)



SK14・SK15・SK17・SK18(西から)



SE01(南から)



SE02(南から)



SE03(東から)



SK01(南から)



SD05・SK02(北から)



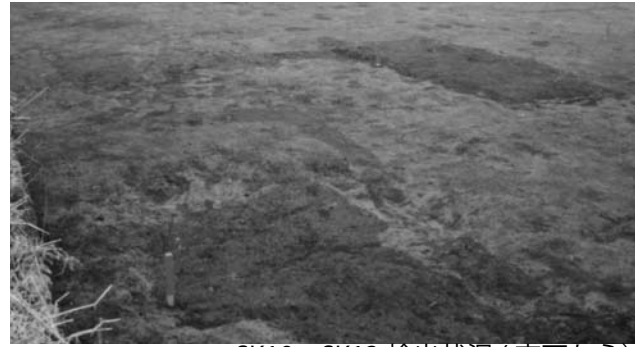
SK09・SK10(南から)



SK17 遺物出土状況 (南から)



SK11・SK12(西から)



SK19・SK13 検出状況(南西から)



SX01・SX02・SX03 検出状況(北から)



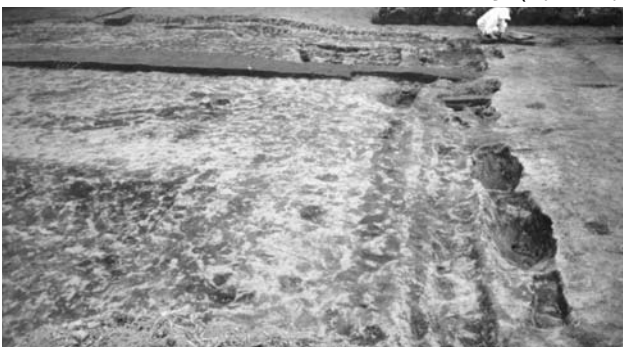
SX01・SX02・SX03 検出状況(南から)



SX01 全景(東から)



大畔 SF01(西から)



SK14・SK15・SK17・SK18・耕作痕(東から)



SX01 西辺(北から)

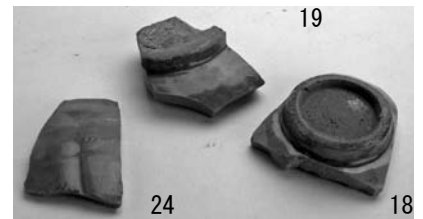
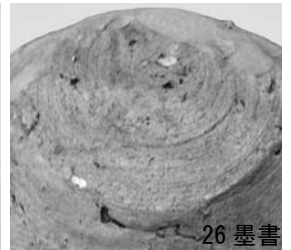


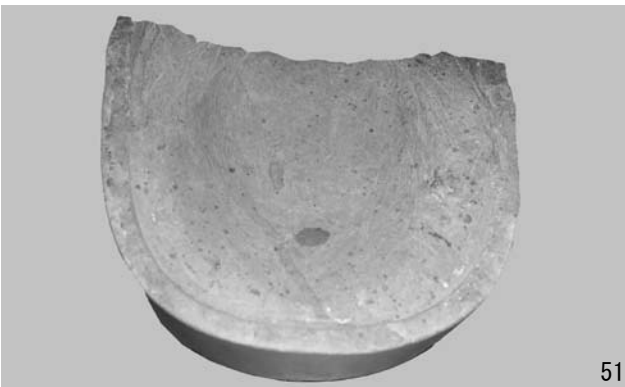
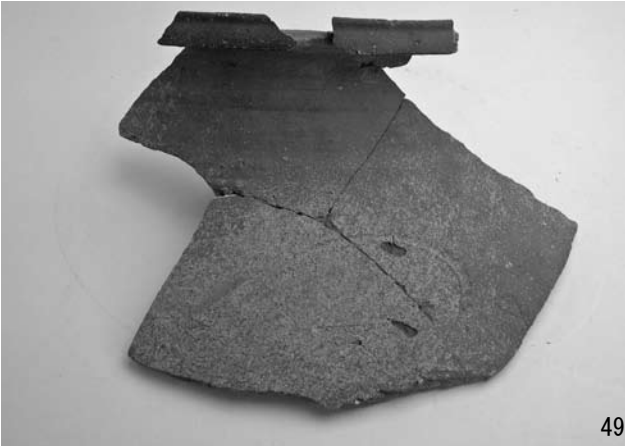
SX01 東半耕作痕(南から)



北西拡張区(北から)

Plate 5





附論 竹野一丁目遺跡における中世の古環境について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鈴鹿川右岸の低位段丘上に位置する竹野一丁目遺跡では、発掘調査によって中世の集落跡が確認されている。集落は、正方位の溝で区画された宅地内に北から住居、庭や屋敷畑と思われる空閑地、水田が配置されている。このうち、水田は地下水位の高い低地を15×20m以上の方形に掘り込み、西側の溝に対して水口が設けられていることから水田跡と判断されていたもので、2度にわたって拡張されていることが確認されている。今回の分析調査では、中世の水田の様態や、可食植物の種類などの情報を得ることを目的として、花粉・植物珪酸体・種実分析を行う。

1. 試料

調査地点は、2時期にわたる【註1】水田の断面が観察された調査区東壁である。堆積層は発掘調査時に下位よりⅠ～Ⅴ層に区分されており、Ⅰ・Ⅱ層が黒色土、Ⅲ層が黒褐色土、Ⅳ層が暗灰褐色土、Ⅴ層が現水田の床土とされる。このうちⅡ層（水田2）・Ⅲ層（水田3）【註2】が中世の水田耕土とされる。試料は、水田耕土とされるⅢ層（試料番号2）・Ⅱ層（試料番号1）とその下位のⅠ層（試料番号3）【註3】より採取された3点である。

2. 方法

(1) 花粉分析

湿重約10gの試料について、KOH処理、篩別（250μm）、重液分離（ZnBr₂：比重2.2）、HF処理、アセトリシス処理の順に物理・化学処理を施し、試料から花粉・孢子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類の同定・計数を行う。結果は、同定・計数結果の一覧表として表示する。

(2) 植物珪酸体分析

分析は、近藤・佐瀬（1986）の方法を参考にした。湿重3g前後の試料について、過酸化水素水（H₂O₂）・塩酸（HCl）処理、超音波処理（70w, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥し、その後、プレパラートで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査しながら、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬

（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、同定・計数結果の一覧表と植物珪酸体組成の層位分布図として示す。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めている。

(3) 種実分析

試料を1mm・0.5mmの篩いを用いて水洗篩別しながら種実化石を拾い出し、双眼実体鏡下でその形態的特徴から種類の同定・計数を行う。

3. 結果

(1) 花粉化石

結果を表1に示す。花粉化石は調査を行った全試料で少なく、その保存状態は悪い。検出された種類は、木本花粉ではツガ属、コウヤマキ属、クマシデ属・アサダ属、アカガシ亜属、ニレ属・ケヤキ属、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節・ウナギツカミ節、ソバ属、キンボウゲ科、アリトウグサ属、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ科であり、このほか種類が特定できないシダ類孢子が検出される。これらの中では、イネ科と栽培種であるソバ属の検出数が多い。

(2) 植物珪酸体

結果を表2・図1に示す。植物珪酸体は、3試料で検出され、短細胞珪酸体の検出個数が多い。保存状態は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体で不良であり、表面に小孔（溶食痕）が生じている。下位の試料番号3（Ⅰ層）では、ネザサ節が高率を占め、キビ族やウシクサ族（ススキ属）、イチゴツナギ亜科などが伴出する。また、栽培植物のイネ属がわずかに認められる。試料番号1（Ⅱ層）では、Ⅰ層と同様な植物珪酸体組成を示す。ただし、イネ属の出現率がやや高くなり、特に機動細胞珪酸体では14%を示す。試料番号2（Ⅲ層）でも、Ⅱ層とほぼ同様な植物珪酸体組成を示す。本試料では、稲籾に形成されるイネ属類珪酸体もわずかに認められる。

(3) 種実

種実化石は、調査を行ったいずれの試料からも全く検出されなかった。

4. 考察

今回調査を行ったⅠ層～Ⅲ層では植物珪酸体は良好に出現したが、花粉化石が少なく、種実化石は全くない。このような産状は、植物珪酸体が種実・花粉に比較して風化に対する抵抗性が強いことに起因するものであり、花粉化石の保存状態を考慮すると、花粉・種実は堆積後に分解・消失していることが示唆される。したがって、得られた花粉化石は偏った組成となっている可能性が強

く、ここでは植物珪酸体の産状を中心に当時の水田の様態や植生について検討する。

栽培種のイネ属の植物珪酸体はⅠ～Ⅲ層から連続して検出され、Ⅱ層（水田2）・Ⅲ層（水田3）では機動細胞珪酸体で13～14%の出現率を示した。過去の稲作を推定する場合、水田の規模、稲作技術、イネの種類などが現在と過去で同様であったとは考えにくい、現在の水田耕土におけるイネ属の産状は過去の稲作を推定する上で目安となる。現在の水田土壌におけるイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、イナワラ堆肥連用（8年間：500kg/10a/年）の水田土壌表層において16%を示したとの報告がある（近藤，1988）。今回の結果では、Ⅱ層（水田2）・Ⅲ層（水田3）では現水田耕土の値と比較してやや低いものの、ほぼ同様の値が得られているこのことと、Ⅲ層で稲作に由来する植物珪酸体も認められていることを合わせ考えると、Ⅱ・Ⅲ層の時期、すなわち水田2・水田3で稲作が行われていたことはほぼ間違いないと推定される。また、Ⅰ層の時期も周辺で稲作が行われていた可能性があるが【註4】、Ⅱ層からの落ち込みの可能性もあり断定はできない。イネ属以外の栽培種としては、各層からソバ属の花粉化石が認められている。上記したように花粉化石は偏った組成となっている可能性が強いものの、本種類が虫媒花で花粉生産量が少ない種類であることを考慮すると、本種類も当時の栽培種の一つであった可能性がある。

表1 水田跡の花粉分析結果

種類(Taxa)	試料番号	2
木 本 花 粉		
ツガ属		1
マツ属		1
コウヤマキ属		-
クマシデ属		-
コナラ属		1
ニレ属		3
草 本 花 粉		
イネ科	107	-
カヤツリグサ科		-
サナエタデ節		4
ソバ属		18
ナデシコ科		-
キンボウゲ科		-
アキノトウグサ属		1
ヨモギ属		-
他のキク亜科		3
タンポポ亜科		1
不明花粉		2
シダ類胞子		
シダ類胞子		27
合 計		
木 本 花 粉		6
草 本 花 粉		134
シダ類胞子		2
総 計		169

また、植物珪酸体組成が層位的にほとんど変化していないことから、Ⅰ～Ⅲ層の時期を通じて、遺跡周辺のイネ科植物相は大きく変化することがなかったと推定される。植物珪酸体組成において卓越するネザサ節は、地面に光の射す開けた場所に生育する種類である（室井，1960）。このことは、当時の本地域が開発の及んだ地域であったとする考古学的見解と調和的な傾向とみなせる。

引用文献

- 近藤錬三（1983）植物珪酸体（プラント・オパール）分析の農学および理学への応用．十勝農学談話会誌，24，p.66-83.
 近藤錬三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，P.31-64.
 近藤錬三（1988）十二遺跡の植物珪酸体分析．鑄師屋遺跡群十二遺跡-長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書，p.377-383，御代田町教育委員会．
 室井緯（1960）竹笹の生態を中心とした分布．富士竹類植物園報告，P.103-122.

【编者註】本論では、資料提供時の情報の混乱からSX01埋土（Ⅰ層）が耕作前の層であるという前提で考察がなされている。しかし、本文中に記したようにⅠ層はSX01（水田1）の耕作土または床土と考えられる。

- 註1.「3時期にわたる」が正しい
 註2.「このうちⅠ層（水田SX01）・Ⅱ層（水田SX02）・Ⅲ層（水田SX03）」が正しい。
 註3.「水田耕土とされるⅢ層（試料番号2）・Ⅱ層（試料番号1）およびⅠ層（試料番号3）」が正しい。
 註4.「Ⅰ層の時期も稲作が行われていたとされているが」が正しい。

表2 水田跡の植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	遺構名		
	水田3 Ⅲ層 試料番号2	水田2 Ⅱ層 1	水田1 Ⅰ層 3
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	13	11	6
キビ族	1	3	5
タケ亜科ネザサ節	124	172	205
タケ亜科(その他)	28	26	21
ヨシ属	1	-	2
ウシクサ族ススキ属	13	16	8
イチゴツナギ亜科	7	4	5
不明キビ型	14	11	12
不明ヒゲシバ型	9	47	18
不明ダンチク型	3	6	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	20	18	3
キビ族	-	1	-
タケ亜科ネザサ節	47	49	34
タケ亜科(その他)	43	33	29
ウシクサ族	17	13	18
シバ属	1	-	2
不明	19	10	20
合 計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	213	296	286
イネ科葉身機動細胞珪酸体	147	124	106
検 出 個 数	360	420	392
組 織 片			
イネ属類珪酸体	3	-	-
イネ属短細胞列	2	1	3

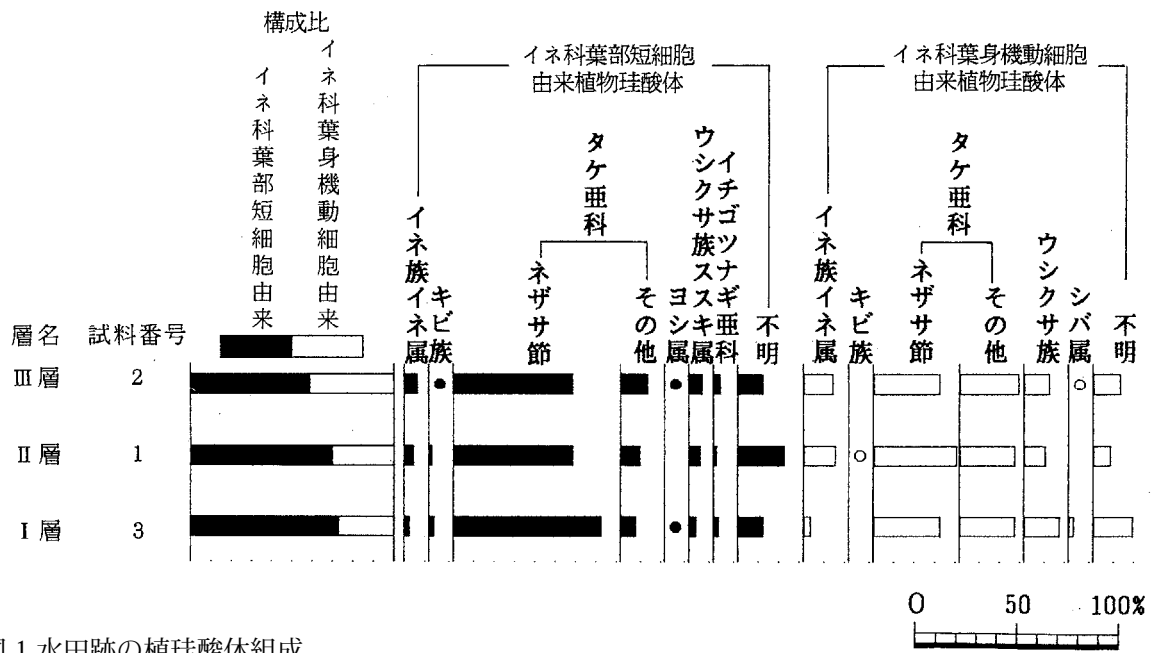
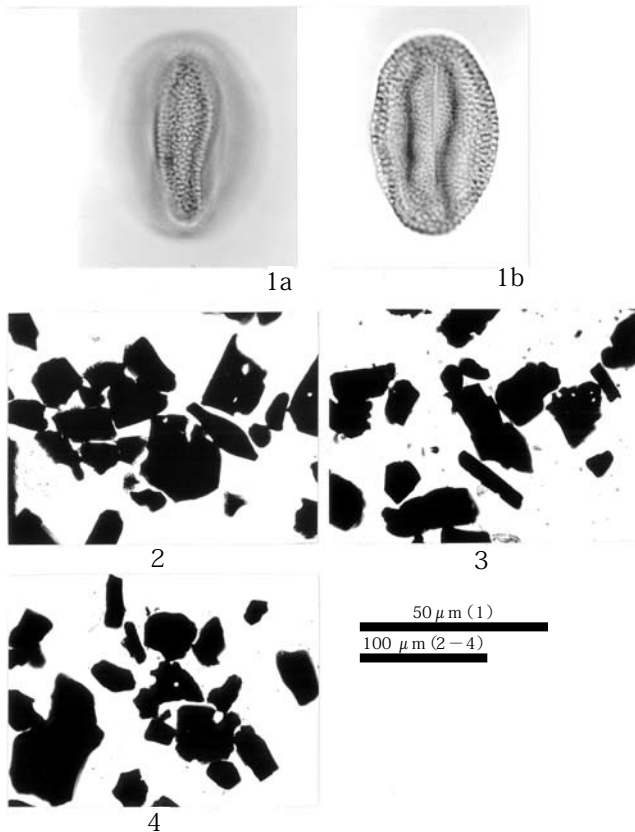


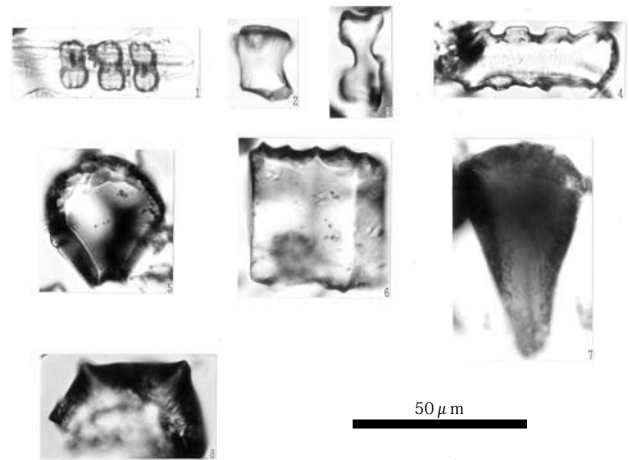
図 1 水田跡の植珪酸体組成
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満をあらわす。

図版 1 花粉化石と花粉分析プレパラートの状況写真



1a・b. ソバ属 (II層; 資料番号 1) 2. 状況写真 (III層; 資料番号 2)
3. 状況写真 (II層; 資料番号 1) 4. 状況写真 (I層; 資料番号 3)

図版 2 植物珪酸体



1. イネ属短細胞列 (I層; 資料番号 3)
2. ネザサ節短細胞珪酸体 (III層; 資料番号 2)
3. ススキ属短細胞珪酸体 (III層; 資料番号 2)
4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (III層; 資料番号 2)
5. イネ属機動細胞珪酸体 (I層; 資料番号 3)
6. ネザサ節機動細胞珪酸体 (III層; 資料番号 2)
7. ウシクサ属機動細胞珪酸体 (III層; 資料番号 2)
8. イネ属穎珪酸体 (III層; 資料番号 2)

報告書抄録

ふりがな	たけのいっちょうめいせきだいいちじはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	竹野一丁目遺跡第1次発掘調査報告書							
編著者名	藤原秀樹							
編集機関	鈴鹿市文化振興部 考古博物館							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL 059 (374) 1994							
発行年月日	西暦2007年5月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけのいっちょうめいせき 竹野一丁目遺跡	三重県鈴鹿市 竹野一丁目9・10	24207	1138	34° 52' 52"	136° 33' 41"	19960411 ～ 19960507	680 m ²	マンション建築
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
	集落	鎌倉時代	溝, 掘立柱建物 井戸, 水田, 土坑 ピット	山茶碗, 山皿 青磁, 土師器皿 土師器鍋, 石硯 常滑焼, 信楽焼	南北方向の溝で区画された宅地。掘立柱建物, 井戸, 土坑, 畑, 水田が検出された。			

竹野一丁目遺跡発掘調査報告書

平成19年5月31日

編集：鈴鹿市考古博物館

〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224
TEL059-374-1994 FAX059-374-098

Takeno 1-chome Site 1st Excavation Report
Suzuka city, Mie pref., Japan

May, 2007

Suzuka Municipal Museum of Archaeology